
かざなぎの記

藤原ゆかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かざなぎの記

【Nコード】

N78770

【作者名】

藤原ゆかり

【あらすじ】

天涯孤独な文学少女凧子は、台風の日雷に打たれて気を失った。目覚めれば見知らぬ森の中。結構楽しく自給自足の日々を送る彼女の前に、ぼろぼろになったドレスを着た少女が現れた。少女を助けた凧子は、成り行きで王城へ。ちよつとした騒ぎを無愛想な宰相に見咎められ、偏食の王子の世話係をすることに。孤独に慣れた凧子が、人との繋がりを手に入れる物語。

1 (前書き)

初めて長編小説を書きます。

全体の構想はできていますが、危なっかしい進行になると思われます。

予想を裏切る展開、きらきらしい恋愛、胸が躍る冒険等はごぞい
ません。

それでも読んでやるうー！という奇特な方は、どうぞお付き合いく
ださい。

漂う湯気を追い散らした風が無防備な背中を撫で、肌が粟立つ。

急いで岩に上がると、凹凸に足裏のツボを容赦なく刺激され、私は情けない声をあげた。

「痛っ」

気を取り直し、目の前の湯につま先を差し入れる。少し熱いが、耐えられないほどではない。そろそろとしゃがみ、身を沈めることしばし。ぶるつと震えがきて、全身が温かくほぐれていく。

「はあく、極楽極楽」

背後の岩にもたれ、目を閉じて心地よさを満喫。木漏れ日が瞼を染める。

木立を通り抜ける風に混じり、啄木鳥が木を穿つ音、時折縄張りを争う鳥たちの声。

目には見えないマイナスイオンも浴びまくりだろう。多分。

そう、ここは森の中の温泉だ。

貸切状態に加え、100%源泉掛け流しという贅沢さ。

事情を知らない人にとっては、うらやましいことこの上ない状況だろう。

あくまで、事情を知らなければ。

「もう一回、現状把握しところか……」

私は、口癖のようになった独り言を空しく呟いた。

1 (後書き)

一度書いてみたかったトリップものです。

最初は江戸時代小説を書いていたのですが、それを差し置いてなぜかこの話が先に出てきてしまいました。

十分に気をつけてはおりますが、人称がおかしかったり、誤字脱字が目についた方は、ご指摘くだされば幸いです。

2 (前書き)

本文中の表現は、実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

アパートの部屋に入り、鍵をかける。

足に合わないパンプスを脱ぎ捨て、鞆を落とすと、私は電気も点けず座り込んだ。

床が不平を言うように軋む。

ささくれ立った畳がストッキングに引っかったが、着替える気にもなれなかった。

「あのハゲ親父……」

薄笑いを浮かべた今日の面接官の顔を、思い出すだに腹が立つ。

私は両親の顔を知らず、田舎の施設で育った。高校進学のためこの街に出てきて、卒業後小さな印刷所に就職。そして先月その会社が潰れ、ただ今絶賛就活中。しかし不況の波は厳しかったのでありました。以上。

悲しいことに、わが人生を振り返ると100文字以内に難なくおさまってしまう。

自棄酒でもあおりたいところだが、まだ19歳だ。

「お酒はハタチになってから」
施設を出て一人暮らしを始めるときに、園長先生に耳がタコになるほど聞かされた言葉が、口をついて出る。

その先生も去年亡くなって、私を覚えていてくれる人はどれくらい残っているだろうか。

急に人恋しくなり、テレビを点けた。

『 』
に暴風、波浪、雷警報、河川や沿岸には近寄らないで下さい。

地元漁協が警戒にあたっている模様です』

接近中の大型台風が、朝の予報より進路をやや北寄りに変え、上陸したようだ。

予測によると、このあたりも暴風域に入るようで、早くも風が吹き始め、遠雷が響いている。

まともに巻き込まれたら、このアパートなどひとたまりもないだろう。

私は1LDKの部屋を見渡した。

避雷針もついていない、某リフォーム番組も真っ青の超ボロイ木造アパート「コーポ柿内」。

一応ユニットバスも一口コンロもついている。

そして何より家賃が安い。
いわゆるつきという噂もあったが、私は現実主義だし、オカルト関係は怖くない。

強いて言えば蔵書で床が抜けるのが怖いかも。

基本的には図書館を利用するが、新古書店で好きな本が嘘みtainな値段で売られているのを見かけると、ついつい可愛そうになり連れて帰ってしまうのだ。

ジャンルを問わず集まった本は、壁際に並んだ手作りのちゃっちな本棚に納まっている。

そしてゴミ置き場から拾ってきた時代遅れの分厚いテレビ。ビデオデッキはDVDに買い換えた前の職場の同僚からもらった。

図書館で借りる時代劇や海外の白黒映画のビデオを鑑賞することは、読書と並んで至福の時間だ。

そんなわけで、私はこの古いアパートに愛着を持っていた。

テレビ画面では偶蹄目のキャラクターが、近々アナログ放送終了の旨を宣伝している。

「新しいテレビが買えない人間はどうすればいいのさ」
テレビやチューナーどころか、早く職を見つけないと住む所さえ
ままならないのだ。

ブラウン管の灯りに部屋がぼんやりと照らされている。外が暗く
なっているのに気がつかなかった。

座り込んでいるあいだに大分時間が経ってしまったようだ。

電気を点けようと立ち上がると、突然テレビ画面が消え真っ暗に
なった。

電気代は溜めていないはずなのに。

それにしても暗い。外を覗くとどこにも灯りがなく、どうやら付
近一帯で停電がおこったようだった。

時折明滅する稲光を頼りに懐中電灯を探し当て、スイッチを入れ
ると点灯した。

いつから入っていた電池だろう。明日までもつといいけれど。

もたもたしているうちに風がいよいよ強まり、雨も降ってきたよ
うだ。台風の進路が変わったのかもしれない。

ベランダ（というのもおこがましい）が軋む音に混じり、何かが
カラカラと転がっている。

「やばい！」

懐中電灯で照らすと、空のバケツが転がり、ネギやパセリを植え
た鉢が横転している。

つつかけが見あたらなかったので、急いで玄関からポンプスを持
ち出し、床にビニール袋を広げた。

頭からタオルを被り、百均のビニールガッパを着る。懐中電灯片
手にベランダに出て、救出活動にあたった。

鉢を室内に運び終え、背後を振り返ると、柵のすき間につっかけ
が片方ひっかかっているのが見えた。

しゃがみこんで拾おうとすると、柵をすり抜けて落ちていく。

とつさに手すりにすがり手を伸ばした。

途端。

耳をつんざく轟音が響き、足元が崩れた。

そつえばばらんだの板腐ってたなあ………

視界が暗くなる中、暢気にそんなことを考えていた気がする。

2 (後書き)

主人公のフルネームは清原凧子です。清少納言からとりました。タイトルの「かざなぎ」は「風凧ぎ」「風和ぎ」で、主人公の名前からです。

無風地帯の「台風の日」の意味も込めて。

「ぶえつくしよい！」

おっさんのようなくしゃみで、目が覚めた。

目の前には水平に地面。そして草のドアップが。

このエノコログサが、私の鼻腔を攻撃したようだ。
あれほど吹き荒れていた風雨はやんでいる。

ベランダが崩れて、アパートの裏庭に落ちたんだろうか。

全身を少しずつ動かしていく。

懐中電灯を握りしめたままの右手をにぎにぎ。

続いて時計をはめた左手、問題なし。

首、鞭打ちになっていない。

左足首を動かすと、鈍い痛みが走る。靴はどこかへ行ってしまったようだ。

その他あちらこちらがズキズキしたが、二階から落ちてこれぐらいで済んだら儲けもんだろう。

割と無事みたいだな、と思いながらどうにか上半身を起こした次の瞬間、ぎよっとした。

「はあ　？」

木だ。木がいっぱいある。

それも裏庭にあるはずの、貧弱なビワの木ではない。

ぐるりと見渡した周囲には、様々な高さの木々や灌木が生い茂り、見通しがきかなかった。

あっけにとられて見上げた空は、田舎でも見たことがないほど青

い。

空の色だけを見れば台風一過と思い込むこともできた。

しかし、周囲にその爪痕は残されていない。

私が横たわっていた部分の地面のみが、ビニールガツパの水滴を受けてわずかにぬかるんでいる。

少なくともアパートの敷地内に、こんな場所は存在しない。

真っ白になる頭をなだめながら、必死で考える。

「ここはどこですか？」

どこかの森の中です。

「私は誰ですか？」

清原凧子、十九歳、無職です。

「私はどうしてここにいるんですか？」

全くもってわかりません。

自問自答をするも、虚しく終わる。

とりあえず片方だけパンプスを履いているとぐらぐらするので、濡れたカツパ共々脱いでしまう。

どうやら左足首は軽い捻挫程度で済んだようだ。

足を庇いながら草の上に腰を下ろす。

まあ、記憶喪失という最悪のパターンに陥らなかつただけ良しとしよう。

それでも思わなくては、やってられない。

さて、これからどうしよう？

2 (前書き)

お気に入り登録して下さった方、ありがとうございます。

自分の書いた文章が誰かに読んでもらえるということが、とても嬉しいです。

まだまだ序盤ですが、これからもよろしくお願いします。

まずは、ここがどこなのか知らない。

辺りは濡れていないし、カップに水滴が残っていたことから考えて、ここに来てからそう長い時間は経っていないはずだ。

気合を入れて立ち上がり、周囲を眺める。

さつきは動転していて気がつかなかったが、背後に背丈ほどの高さの崖があった。

露頭の中ほどから突き出た木の根に、見慣れた黒いパンプスが引っかかっている。

ということは。

「ここから落ちたってこと？」

崖の下に一抱えほどの岩が半分地面に埋まっているのを見つけて、頭を打ちつけなかったことに心底安堵した。

ひとまず両足に靴を取り戻し、探索をはじめめる。

パンプスが引っかかっていた木の枝には濡れたカップを干し、目印に濡れたタオルを結びつけておいた。

周囲のうつそうとした森に比べ、今いる場所は木も比較的背が低くまばらで、やや開けているようだ。

耳を澄ませると、微かに水音が聴こえる。

自分が倒れていた地点を見失わないように気をつけつつ、音がする方向へと歩く。

捻った足とパンプスのヒールに苦労しながら、木の根や岩を迂回して行くと、それほど離れていない場所に小川があった。水量はそれほど多くなく、歩いて渡れそうだ。

来た方向を振り返ると、崖の目印が見える。

この開けた一帯は、以前川だったのかもしれない。

ここまで歩いてくる途中にあった植物は名前のわからないものが大半だったが、ヨモギや、ヤナギの仲間であるう低木など、河原によく生えるものも見受けられた。

流れに手を浸すと、冷たさに思わず声があがる。少しためらってから口を含めば、乾いた咽喉をすっきりとした水が伝い落ち、胃に納まるのがわかった。

岩に腰掛けて、痛めた足首を冷やしながら考える。

私が今住んでいる街には、こんな清流を抱える森はない。

物心ついてから、高校に入るまでの期間を過ごした施設のある田舎でさえ、よほど山奥まで分け入らなければならぬだろう。

一体どうやってここに来たんだろうか。

ベランダで気を失ったことは確かだ。そして目覚めると崖から落ちて倒れていた、と。

「うん……」

その間の記憶がさっぱりない。

無理やり仮説を立ててみよう。

その一。

「台風で飛ばされた」

そんなに風が強くなかったことを差し引けば、ありえなくもないかも？欧米では竜巻で飛ばされた家畜が無傷で見つかることもあるらしい。

そういえば、オズの魔法使いのドロシーは竜巻で飛ばされたんだっけ。私もどうせなら家ごと飛ばして欲しかった。

飛ぶといえば、メリー・ポピンズもそうだ。でも私が持ってたの

は傘じゃなくてカツパだしなあ。

その二。

「誰かに連れてこられた」

雷に驚いて気絶した私を誰かが発見して……普通は森の中に連れてこないだろう。

いや待てよ、仮死状態になった私を死体だと勘違いして、動転して山中に遺棄したとか。

苦しいか。

恨みを買ったり邪念を持たれるような人どころか、知り合いすらあんまりいないし。

あんなボロアパートにいる時点で貧乏に決まってるから、金銭目的の拉致ということも考えにくい。

大体、あんなに低い崖からわざわざ私を落とす意味がないだろう。

ひとつ確かなことは、帰る方法がわからないということだ。

『道に迷ったときは、その場から動かないこと』というのが常識だが、待っていても私を探してくれる人はいない。

唯一搜索願を出すとしたらアパートの近所に住んでいる大家さんだが、生憎三日前に家賃を支払ったところだ。あと一月はセールスマン以外誰も尋ねてこないだろう。

私をここに連れてきた犯人（仮）でもいいから、今すぐ出てきて状況を説明して欲しい。

遭難、という言葉が脳裏に浮かんだ。

不意の風が沢を渡り、木々がざわめく。

気がつけば、目に痛いほどの青だった空は色を薄め、徐々に夕焼けの色を滲ませていた。

流れに浸っていた足は、既に感覚が鈍くなるほど冷えている。

タオルは崖の木の枝に置いてきてしまったので、ぞんざいにスーツの袖で拭い靴を履いた。

水を含んだストッキングが風にさらされ、私は軽く身震いをする。

ここがどれぐらいの標高かはわからないが、このまま夜になれば沢沿いでもあるし、気温が下るだろう。暗くなる前にどこか風を避ける場所を探さなくては。

一度傾きはじめた太陽の光は深い森の木々に遮られ、たちまち辺りに夕暮れの気配が漂う。焦る気持ちをなだめつつ、足を庇いながら、流れを背にして倒れていた崖下へと戻った。

カップを回収して羽織り、タオルを首に巻き、懐中電灯を手にしたところで気がついた。

「あーっ！」

灯りはちゃんと点くだろうか。数度カチカチとON・OFFを繰り返すと豆電球が点灯し、心底安堵した。

自分の迂闊さに冷や汗をかきながら、潜伏場所を物色する。

ここから川までの見通しのいい一帯には、適当な場所はないだろうし、万が一雨が降って増水したときあまり川が近すぎると厄介だ。

この足で崖に登るのはきついしなあ……

辺りには体感できるほどの勾配はなかったが、先ほどの川の流れの向きから考えて、緩やかなカーブを描いた崖を右手に上流の方へと向かう。

崖といっても二メートル前後のものなので、大規模な崩れの心配はないだろう。どこか崖の窪みにでも潜り込めたらと思ったのだが、生憎私の体が納まりそうなスペースは見つからなかった。

懐中電灯があるとはいえ、暗くなつてから歩き回るのは危険だ。次のカーブを曲がったら下流へ引き返そうと考えていたが、曲がったところで崖は一度途切れていた。

崖が崩れた跡のようで、土砂が扇状に広がりやや急なスロープを作っている。

大き目の石を拾い上げ、上へ向けて放つてみたが、周囲の地面は崩落してこなかった。斜面は草で覆われ若木がまばらに生えており、これ以上崩れることはなさそうだ。

覚悟を決めて、草木にすがりながら這い上がる。

途中握った枯れ木が折れてしまいバランスを崩しそうになったが、なんとか崖の上に出ることができた。

息があがり、膝と足首が痛む。日頃の運動不足が祟った結果だ。

いや、そもそもこんなところに飛ばされて？しまったせいだ。畜生。

木の影が落ちることもあり、既に辺りはほぼ暗くなっていて定かではないが、登った先は草地になっているらしかった。

「ちゃらら ちゃつちゃちゃ」

疲れの余り、懐中電灯をポケットから出すとき某青ロボットの小

芝居をしてしまう。いかん、壊れかけている自覚がある。気を引き締めねば。

左右を小刻みに照らしながらしばらく歩くと、視界の端に妙なものが映った気がした。立ち止まってその方向に懐中電灯を向ける。

「ぎゃー！」

光の輪の中に、うねうねした物体がのたうちまわっている。

一瞬意識が飛びかけたが、落ち着いてよく見るとそれは動いてはいなかった。

ばくばくする心臓をなだめつつ、照らしながら辿っていくと、同じようなものがいくつも集まって太くなり、大きな木の根元にたどり着いた。

わずかな範囲の灯りでは定かでないが、私の両腕では一抱えにできないほどの太い根が幾本も隆起しており、地面から一部離れながらもしつかりと取りついている。

根をまたぎ越えながら近づくと、木の内部がウロになっているのがわかった。

私一人ぐらいなら入れそうだ。

何も棲みついていないことを確かめ、足を踏み入れる。

意外と湿り気の少ないウロの内部は、暖かだった。カップにくるまって横たわると、腐葉土の匂いに包まれる。

しばらく忘れていた田舎の山のような匂い。安堵に包まれると共に、急に眠気が襲ってきた。

懐中電灯を消しても、月明かりがウロの入り口から差し込んでくる。

葉ずれに混じる、樹液が流れる微かな音を聞きながら、私は眠りに落ちていった。

4 (前書き)

本文中に、現代日本においては法で禁じられている行為が出てきますが、それを推奨するものではありません。ご了承ください。

小鳥たちのさえずりが朝の訪れを告げる。木漏れ日はあくまで優しく、吹く風は爽やかだ。

が、私の目覚めは最悪だった。

足が痛むし、地面に直接丸まって寝ていたせいで全身が軋む。もし今鏡をのぞけば、ひどい顔をしていることだろう。

首を傾けると、バキョツと嫌な音がした。

呻きながら外へ出て、思い切り反り返り伸びをすると、頭上に広がる鮮やかな緑の梢が目飛び込んできた。

振り返って、朝の光の下で改めてねぐらにしていた木を見ると、感嘆の息が漏れる。

たくましい根は絡みあいながら周囲に伸び広がり、太い幹を地面に縫いとめている。

雷で一度折れたのだろうか、見た目より大きなウロの内部はところどころ黒く焼け焦げているが、周囲の樹皮は分厚く盛りあがり、縁を巻き込んで入り口を狭めていた。ウロの上部からはねじくれた太い幹が二本に分かれ、梢を持ち上げる枝々を支えている。

周囲にこれより高い木は幾らもあるが、年月を経てなお生命力に溢れた姿は、どっしりとした王者の風格をまとうていた。

惚れ惚れと木を眺めていると、不意に腹が鳴った。

お腹が空いた。自慢じゃないが、私は三食きっちり食べる派なのだ。

目を覚ましたのも、鳥に起こされたというよりは空腹に耐えかねた結果だった。

思い返せば昨日帰宅してから今まで何も食べていなかった。口にしたのは川の水だけだ。

食料を確保しなくてはならない。私はギョロギョロと周囲を見渡した。

殺気を感じたのか、地面を啄ばんでいた小鳥が数羽、けたたましく鳴きながら飛んでゆく。失敬な。

鳥が飛び去った後の地面に緑色の球体が幾つも転がっている。これは……

「クルミ!？」

駆け寄って手にすると、私知っているものより一回り大きい。

靴でぐりぐり踏みにじると果皮が砕け、中から茶褐色の硬い核が現れた。幸運なことに、ウロのある大きな木はやはりクルミだったようだ。

嬉しくなっただけであちらこちらに転々と散らばっている実を拾い集めたが、バケツ半分ほど集まったところで、はたと気がついた。

すぐに食べようと思えば、果皮を取り去った後水に漬けて、残ったカスや渋を洗い流す必要がある。

昨日の川は小高いこちらからはよく見えるが、昨日登った斜面を降りていかなくはならず、億劫だ。

近くに水がないか探してみることにしよう。

伊達に田舎っ子なわけではない。水がありそうな場所になんとか見当はつく。

学校に特に親しい友達もおらず、施設に年の近い子供が継続していなかったため、私はよく山で遊んでいた。

小さな頃は迷子になって先生にこっぴどくしかられたこともあったが、大きくなるにしたがって判断力がついたこともあり、過疎で荒れかけた里山は私にとって庭のようになっていた。

古い図鑑を片手に歩き回り、草や花の名前を覚え、木の実を摘む。悲しいことがあると、気がすむまで大きな木に寄り添っていた。

高校進学のため田舎を離れたときは、山が恋しくてたまらなかつ

たものだ。

山のことや食べられる植物を教えてくださいるおばあちゃんもいて、一緒に草もちを作ったり、時代劇をみたりした。私が中学の時に亡くなってしまったが、たぶん向こうが思っていた以上に、今でも私の中で大きな存在として残っている。

クルミの果皮が腐り落ちるのを待ちきれずに、そのまま割ってべとべとの手で中身をかき出し口に入れ、エグさのあまり半泣きになった幼い私に、笑って方法を教えてくれたのも彼女だった。

ビニールカッパに拾い集めた青いクルミを包み、お守り代わりに懐中電灯をポケットに突っ込む。

地面には厚く木の葉が積もっており、足元が覚束ないので、足をこれ以上挫く前にパンプスのヒールは思い切って折ってしまった。

手近にある枝を折ったり、草に結び目を作ったりして道しるべをつけながら、水場を探す。

大小の広葉樹が立ち並ぶ森は薄暗いが、樹冠の合間から時折柔らかな光がちらちら踊り陰鬱な雰囲気はなかった。

私が見た限りでは人工物はおろか、人の手が入った形跡もない。熊や猪と鉢合わせたくはないので、用心のため大袈裟に音を立てながら獣道を辿り、窪地へと向かう。

程なく微かな水音が聴こえ、飛び越えられるほどの小さな流れに行き当たった。

私の山スキルはまだ衰えていなかったようだ。

自画自賛しながら、音を立てて冷たく澄みとおった水を飲み干す。ついでにはしゃばしゃ顔を洗うと、生き返る心地がした。

クルミが流れていかないように、緩やかな水を石や枝で塞ぎ止め、やや上流の浅瀬の石の上で果皮を砕き、水に放していく。

一心不乱に作業を片付け、一息ついてお手製のダムに塞き止められて浮いているクルミの方を見やると、茶褐色の中に何やら白く光るものが混ざっている。

近づいてよくよく見ると、それは小さな川魚だった。流れてきた屍骸かと思っただ、手に取ると僅かに痙攣を繰り返している。

「もしかして……」

昔読んだ宮沢賢治の童話の中に、現在は日本では禁じられているという漁法の話が出てきた。

あの話では、クルミではなく山椒を使っていたが、私は気づかずに小規模な毒もみ漁をやってしまったのではないだろうか。

誰にも見られていないというのに、前科一犯になってしまったような居心地の悪さだ。

どうするかしばらく躊躇ったが、小魚はありがたく食材として頂くことにした。

餓えて死んでしまつては元も子もない。

だれ一人私の生を望んでくれる者がいなくても、いや、だからこそ私は生き汚いのだ。

空腹のせいで思考が殺伐とするのかもしれない。早いところ何か口に入れなくては。

急いでクルミ同士ををこすり合わせて洗い、仕上げに川底の砂で凹凸の渋を磨りおとす。続いて平らな石の上に置き、上からも一つの石を振り下ろして打ち砕いた。

ヘアピンで中身をほじくり出して口に入れると、脂の甘さに頬の内側がキュッと縮み、唾液があふれる。食べ難さにもどかしい思い

をしながら二、三個平らげた。川魚も生のまま頭から放り込む。内臓のほろ苦さがクルミの脂と予想外にマッチして、場違いに上品な味わいだ。

食べることへの純粹な喜びを、長らく忘れていた。宛先のない感謝の念が自然とあふれる。

空腹感が和らいで人心地つくとき、余裕も出てきた。この流れは、昨日見た川に繋がっているのだろうか。

「探検してみよう」

私は残りのクルミを持って、川沿いを下流に向かって歩き出した。

何かしていないと不安になる気持ちに蓋をして。

4 (後書き)

川魚には寄生虫がいるおそれがあるので生食はしないでください(念のため)。

クルマシは栄養価が高く1個あたり約35キロカロリーあり、2個でご飯1膳分に相当するそうです。

小さな流れは、下る途中幾度か他の支流を含んで勢いを増し、またあるところでは地中にしみ込んで勢いを殺しながら、細々と続いている。

はめている腕時計は、落雷の衝撃のせいか壊れていたためわからないが、十五分ほど歩いた頃だろうか。

突然陽光が差し込み、見覚えのある光景が眼前に現れた。

それもそのはず、広がっているのは昨日散々歩いた川原だった。辿ってきた川は既に湧き水と言っていいほどの量となっており、足元の崖を伝って水溜りのような池へとちよろちよると落下している。

何気なく目線を左へ向けると、木々の合間からこれまた見覚えのある奇妙にねじくれた大木が確認できた。目を凝らすと、梢には青い実が沢山ついている。

……あ、一房落ちた。

我に返り、かっ顔が熱くなる。

私は無駄に大回りして、ほぼもとの位置へ戻ってきたのだ。死角になっていたとはいえ、すぐ近くにあった池に全然気づかなかったとは。

「うわー、恥ずかしい……」

何が山スキルだ。ここに誰もいなくて良かった、と初めて思った。

自分の間抜けさにガツクリきたが、何とか喝を入れてよろよろと歩き出す。

ねぐらにしている木に向かって崖の縁を歩くと、ほどなく昨夜上がってきた斜面があった。

やはりこのまま上り下りするには少々急なので、手近の丈夫そうな蔓を力任せに引きちぎってより合わせ、急ごしらえのロープにして、端を木の幹に結びつける。縫えば、思惑どおり四つ這いにならずとも斜面を楽に下ることができた。

先程上から見つけた池を過ぎて、昨夜は歩かなかった方面の崖沿いに行く。道に迷う心配がないので、めばしいものがないか探しながら歩いてみると、崖の下で黒く光るものに気がついた。

幾つかに砕けた石が、ガラス質に鈍く輝いている。比較的大きなひとかけらを取り上げてみれば、割れた面は細かな波紋を描き、縁は薄くいかにも鋭そうだ。髪の毛を一本抜いてあてがい滑らせると、ふつつりと切れた。

「確か、黒曜石？」

旧石器時代の矢尻に使われていたというあれ。なぜここにあるかはわからないが、簡単なナイフ代わりにはなりそうだ。細かい破片も丁寧に拾い集め、大切に木の葉に包んだ。思わぬ収穫にテンションがあがる。

食料、水、ナイフとくれば、次に必要なのは。

「火！」

魚も焼けるし、獣避けにもなる。何よりそのうち寒くなれば、暖をとる必要がでてくるだろう。

だが、当然ながらライターもマッチも持っていない。昔おばあちやんと一緒に焚き火をしたことはあるけれど、それも火種があつてこそだ。

脳内百科事典をめくりながら必死で考える。

黒曜石は火打石になるかもしれないけど、火打金がないと使えない。あとは……確か棒を板の上で高速回転させるんだったっけ。

その場に座り込んで、うろ覚えの知識を頼りにキリ揉み式発火法を試みるが、当然ながら一筋の煙も立たない。

いたずらに手の平にマメを作りながら、意地になって揉み立てるうちに、首筋がジリジリしてきた。

空を見上げると、知らぬ間に時間が過ぎていたようで、太陽が真上に昇っている。黒髪のおかつぱ頭も熱を持っていた。

この状況で日焼けを気にするのもなんだかアホらしいが、とりあえず日陰に移動しよう。

傍らに放り出していたクルミを包んだカップとスーツを一纏めに抱えると、懐中電灯が転がり落ちた。何気なく拾い上げようとして、慌てて手を放す。

「あちっ！」

軽量化の意図の全く感じられないアルミ製の古い懐中電灯は、火傷しそうなほどの熱を帯びていた。黒いスーツの上にあつたのも一因かもしれない。

涙目になりながら指先をふーふー吹いていると、テレビで観たあることを思い出した。

懐中電灯が冷めるのを待って分解し、電球を外して反射板を取りだす。スーツのポケットを裏返して綿クズをかき集め、凹んだ反射板の中央に置いた。陽がよくあたっている岩の上に石で固定して、待つことしばし。

目を皿のようにして見守っていると、光を集めた中央部からうっすらと煙が立ち始め、やがてぱつと一瞬くすぶつたかと思うとすぐに消えた。

は、早い。

しかし確かに火が熾ったことに励まされ、再度試みる。

今度は左手に植物の綿毛を集めて持ち、右手に二本の小枝を箸のように構える。くすぶつた瞬間を見逃さず、反射板を箸で挟んで中

身を左手の綿毛の上に落とし包み、間髪入れず大きく振り回した。ポツと火が点き、慌てて集めた枯葉の上に放り出す。必死に吹き立てると、炎があがった。

乾いた小枝やマツカサを追加すると、小さいながらも立派な焚き火の完成だ。流木を数本くべてしばらくすると、一層大きくなった。もう暫く消える心配はないだろう。

息があがり、汗で前髪が額に張り付いている。手と同様、顔も煤で黒く汚れていることだろう。しかし、そんなことはちっとも気にならなかった。

こんな夢中になったのも、ここまでの達成感を感じたのも、子供のとき以来かもしれない。

煙に咳き込みながら、私は思い出せないくらい久しぶりに、声を上げて笑い続けた。

暗闇を背景にして、パチパチと火が踊る。

本日のメニューは、焚き火ではじけた焼き栗、川魚とクレソンを大きな葉っぱで包み蒸し焼きにして、酸っぱい野生のリンゴとクルミのソースをかけたもの、潰したイネ科の実を煮込んだ薄いお粥のようなスープ、そしてデザートに木苺。

どうしても温かいものが飲みたくて作った不恰好なお椀や鍋は、ちょうど良い形の流木を拾ってきて、内側を燃やしてくりぬき、砂で磨き上げた。木なので火にかけることはできず、水を張って熱した石を入れ、地道に湯を沸かすしかないけれども、愛着のある品々だ。

最初のうちは苦労していた食料採集も板についた。仕掛けを作って魚をとり、渋のあるドングリや山菜は川の流れにさらしている。

本当は鳥の一羽でもしとめたいところだが、石を投げても距離も方向も全くのノーコンで無理を悟った。諦めも時には必要ということにしておこう。

それにしても、今日のご飯は美味しかった。

ずっと塩気のない食事に辟易していたのだが、嬉しいことに三日前発見した温泉が、ほんのりと塩気を帯びていたのだ。温かいお湯に浸かれる喜びもさることながら、思いついて温泉の湯で料理を作ると、一味も二味も違う。日常の食事から考えれば塩気ともいえないほどの微かな塩味だが、調味料のない食事に一ヶ月慣らされた舌には十分な味つけだ。

夕食後、私はお椀に入れたヨモギのお茶を啜りながら、膝を抱えて焚き火を見つめていた。

この火は、キリモミ式で熾したものだ。なにしろ反射板は日中、それも条件のいいときにしか使えない。火種をどうやって保管していいかわからなかったし、どんな獣がいるかわからない暗闇で火を焚かないでいるのは不安だ。森を歩いていると獣の気配を感じ、時折鹿の姿を目にすることもあったが、積極的にこちらに近づいてくることはない。しかし、危険な動物がないという保障もなかった。なにより、一人きりで暗闇に包まれるのは、恐ろしくてたまらない。しかし、懐中電灯は電池が切れるのが怖くて、よほどでないにつけられない。

一分足らずで火を熾せるようになるには、相当な時間と手の皮の犠牲を要したが、人間、死活問題となれば大概のことはできるものなのかもしれない。

風もなく穏やかな夜。レモンイエローの大きな月は中天に差しかかるうとしていた。

多少の風雨はあったが、森は幸い大規模に荒れることはなく、私が住まわせてもらっているうつつほは今のところ概ね快適だ。

一度雨が二日間降り続いたときは、川原に幾筋も流れができた。水かさも大分増したので、一段高いところに居を構えたのは幸運だった。誰かと話をするのもないので本来不要だが、私は宇津保物語から名を借り、住処の木のウロをうつつほと呼んでいた。物語と違って超常現象が起きるわけではないが、私にとってこのうつつほは安らげる安全地帯、大袈裟に言えば聖域のようなものだ。

焚き火が消えないよう枝をつぎ足して、わたしはうつつほに入った。柔らかな枯れ草や落葉を厚く敷き詰めた寢床に、胎児のように丸くなる。温泉に入るついでに、泡立つサボンソウで洗ったスーツはすでに型崩れして久しいが、お日さまと草の匂いがある。

うつつほの壁の出っ張りには、持ち物や木の実、燻した魚を入れた、蔓で作ったカゴを連ねて吊るしてある。おばあちゃんから教わった

のを思い出しながら編んだものだ。

彼女から教わったことは、いつも思いがけない場面で役に立つ。おかげで、私は曲がりなりにもこうしてひとりで生きて行ける。

燻る熾火をぼんやりと見ながら眠りについた私の夢の中、久しぶりにおばあちゃんが出てきた。

「凧ちゃん、大きゅうなっても、人はひとりではよう生きられんよ」

昔みたいに、眉尻を下げて困ったように笑いながら。

翌朝、どこかもの悲しい気持ちで目を覚ました。

夢の中で何か大切なことを聞いた気がするのに、おばあちゃんの顔と同様、ぼんやりと霞がかかったようで肝心なところが思い出せない。

スツとする香りのハツカのお茶を淹れ、軽く温めた夕べの残り物で簡単な朝食を済ませると、今日も食糧採集に出かけた。

私がここにきて毎日欠かさず刻んでいる暦は、今朝で一月と一週間。

当初は夏の気配を濃く残していた森も今や完全に秋へと移ろい、木々に絡みついた蔦は日々色をかさねていく。草々もあるものは立ち枯れ、あるものは実って重くこうべを垂れ、小動物たちも忙しく、木の実をいずこへかと運んでいる。

ちよこまかと働くりスたちに負けじと、私も彼らに混じってツルで編んだ籠を背負い、木の実、草の実、草の根と、時間を惜しんで放り込む。

朝晩の冷え込みが確実に深まっていつており、人里に降りる術も見つからない今、どれだけ冬支度を整えられるかは文字通り生死に関わる問題だ。

川をずっと下って行けばいつかは森を抜けられるだろうと考え、実際に試してはみたのだが、細い川は伏流水となって消え、確信を持って道を辿ることは叶わなかったのだ。

いや、今となっては、自分が本当に家に帰りたいたいと思っているの

かどうかもわからない。

家に帰ったとしても、待っていてくれる家族も、私を必要としてくれる人もいはいはない。

ここにいれば、少なくとも誰かに傷つけられることも、誰かを傷つけることもない。

このままではいけないと理性が警告する一方で、どうしてこのままではいけないのだ、と頑是無い幼子のように耳をふさいでしゃがみこむ、臆病でありながら自暴自棄な自分が居るのもまた事実だった。

昼食代わりに干し魚と木の実を噛みながら採集を続け、森の奥に分け入っていく。

冬の間根を掘り出して食べられそうなユリやフユイチゴの茎、リスの貯蔵庫につけておいた目印を確認することも忘れない。

いざとなったら、悪いけれどリスが埋めた木の実を横取りするつもりだ。

リスも自分の集めているものが狙われているとは思ってもいないだろうが、彼らだって私の蓄えた食糧を虎視眈々と狙っているのだからお互い様だ。

この前来たとき、確かあの木の向こうの日当たりの良い藪に、野バラの実がなりかけていた。乾かして保存ができるだろうか。

目当ての場所に近づくと、遠目にも点々と紅い実がみのっているのが見えた。棘に苦労しながら集め、大きめの葉で包んで負い籠に入れる。

この先で先日採ったハシバミの実も、まだ残っているかもしれない。

ついでに見ておこうと思い立ち進もうとした時、はっとした。

遠くで獣の甲高い啼き声がする。

秋の鹿のもの悲しい呼び声とは明らかに違う、切迫した声だ。

長く尾を引いて途絶え、耳を澄ませてもそれ以上は聴こえなかったが、何故か不安を誘う、背筋を凍らすような響きが耳について離れない。

私は鳥肌が立った腕をさすり、踵を返す。

そのまま森の奥へ向かうのは躊躇われた。

そうだ、まだ早いけど、ついでに温泉に寄っていこう。

折しも籠も大方満たされたところだ。帰りの道中で一杯になるとだろう。

昨日も入ったが、一日中歩き回る必要がある今、少しでも体の疲れを癒しておきたかった。

そして、冒頭へもどる。

鳥たちの鳴き声が一際騒がしくなった後、やんだ。

湯に浸かりながらもんもんと来し方行く末を思い悩んでいた私は、意味のない思考を断ち切れ我に返る。

いけない、のぼせてしまふところだった。

いつの間にか、指先もほやほやにふやけている。

いい加減あがつてうつほへ帰ろうと、縁の岩に手を掛けて立ち上がったときのことだ。

「ガサガサツ」

背後の繁みが、不自然に音を立てた。

いる。明らかに、そこに何かがいる。

熊か、鹿か？

物音は次第に近づいてくる。

こちらは無防備にも素っ裸だ。手近に武器になりそうな石や枝もなく、温泉から出るのさえ間に合いそうにない。

騒ぎ立てて、向こうが驚いて退散するのに賭けるしか手段がない。せめて猛獣系じゃありませんように！

私は動悸を抑えて胸一杯に息を吸い込み、下腹に力を込めて繁みを睨みつけた。

「ううおー！！」

すぐ背後の灌木の枝を掻き分けて物音の主が転がり出たと見るや否や、目をつぶって無茶苦茶に叫びながら、両手で湯を掬い相手に浴びせる。

一拍置いて、か細い悲鳴があがった。

……私はこんなに可愛らしい声で叫んでないぞ。

そろっと目を開けてみると、極限まで見開かれた藍色の瞳が飛び込んできた。

人間だ。人間の女の子。

目を合わせたままお互いに硬直する。

数秒の後、頭から水を滴らせた少女は、糸が切れたようにその場にくずおれた。

石化が解けた私は、遅ればせながら焦る。

人様を気絶させてしまった！どうしよう。

そりゃ森の中で素っ裸の女が雄たけびを上げながらお湯をぶっ掛けてきたら、誰だって肝を潰すだろう。

妖怪お湯掛けババアとか思われたかも。

抱き起こした少女は幼さを多分に残している。髪の毛はもつれ、ひどく青白い顔色をしていた。

全身に目をやると、服は藪で引っ掛けたのかあちらこちらかき裂きができ、華奢な手足にも血が筋になって滲んでいる。

脈を確かめると規則正しく打っており安堵したが、とった手の冷たさに胸が痛んだ。

こんな状態の子供に、何という仕打ちをしてしまったんだろう。

少女の露出した手足の傷口をそつと温泉の湯で清めてから、私は服を着て、意識のない彼女を背負いつつほへと急いだ。

9 (前書き)

お気に入り登録が100を越えました。登録して下さいの方々、本当にありがとうございます。よろしければこれからもお付き合い下さい。

今夜は肌寒い。

空の上では風が強いのであろうか、欠け始めた月を雲がせわしく覆っては流れてゆく。

ミミズクか、はたまたフクロウか、森の奥で夜行性の鳥が嗤うように鳴いた。

私は、うつほの中で落葉に埋もれて眠る少女の口元にそっと手をかざし、呼吸が穏やかなことを確かめる。

長い睫毛が落ちるふっくらとした頬は、焚き火を受けて先刻より血色がよく見え、腰まであるウェーブがかかった褐色の髪も、煉瓦色に照り映えている。

出会い頭の印象的な藍色の瞳といい、天然の艶を持つこの髪や、どこか日本人離れた顔立ちといい、異国の血をひいているのだろうか。

少女の服装をまじまじと見返す。

素朴な色合いの長いワンピースは、柔らかかそうな厚手の布地で仕立てられており、袖口や襟ぐりには蔓草や花のような刺繍が施されている。

ワンピースの上から室町時代の打掛腰巻姿のように纏われていた毛織のストールは、精緻な刺繍が施された布のベルトにより締められていたが、今は私の手により外されて、横たわる少女を覆っている。

……私は詳しくないのでわからないが、この格好は何かのコスプレなのだろうか。それとも森に居るということは、今流行の森ガールとやらか？

いずれにせよ、少女を迎えたことで私の聖域は破られた。

このまま惰性で冬を向かえ、彼女を道連れにすることはできない。何があったのかはともかく、傷ついた少女に追い討ちをかけたのは私だし、例えそうでなくとも、こんな子供を見殺しにできるはずなどないのだ。

膝を抱えて目を閉じると、瞼の裏に幼い子供たちの笑顔が浮かぶ。満面の笑み。心に傷を抱えながらも屈託なさそうに笑う顔。不器用ながらやつと浮かべた微笑。

そして、守れなかった笑顔。

この少女の傷が癒えたら、何と少しでも森を抜けよう。この子を待つ家族が居る家へ、必ず送り届ける。

こんな女の子がひとりで迷い込むぐらいなら、さほど人里は離れていないのだろう。正確な道は無理にしてもせめて方角なりともわかれば随分違う。

串刺しにして火に翳された魚の脂が、焼けた石の上に落ちる。炎がひときわ明るく燃え立ち、薪を舐めてパチパチと鳴らす音。

それに混じる落葉が触れ合う音を耳にして、私は素早く目を向けた。

「ん……」

横たわった少女が顔を顰め、身じろぎをしている。

動悸が早くなる。

何しろ久々の会話だ。なんと声をかけよう。「大丈夫？」は白々しいな。

やはり最初に謝るべきだろうか。

もしフランス語やドイツ語しか通じなかったらお手上げだ。「愛してる」とか「よい旅を」とか、そうそう使わない単語しか知らない。

願わくば、日本語、せめて英語が通じますように！

目を覚ました少女は、呻きながら身を起こそうとする。

慌てて彼女を支え、うつほの入り口で頭を打たないように抱きかかえながら外へ導き、木の根に寄りかからせた。

私の顔を見て驚いたように目を見開いて咳き込む彼女の背中をさすり、水が入った木の椀を差し出す。

少女は手を伸ばしかけ、躊躇った。無理もない。

椀に自ら口をつけ、一口含んで飲み下した。視線を同じ高さして、

私はおずおずと精一杯の笑みを浮かべる。

上手く笑えているだろうか。

そつと差し出した椀を、少女はもう拒まなかった。

喉が乾いていたのだらう、息つく間もなく飲み干して、はにかむように目を伏せる。

そんな少女に向かい、わたしは深々と頭を下げた。

「さつきは吃驚させてごめんなさい」

返事はなかなか返ってはこなかった。

ゆっくりと少女の様子を窺うと、戸惑った様子をしている。

言葉が通じないのだろうか。

念のため英語で謝っても同様だった。私の発音が悪くて通じていないということはないはずだ……たぶん。

それでも私が謝っているということは伝わったのだろう、温かさを取り戻した両手で私の手を包むと、柔らかな笑みを向けてくれた。

「A…… m i r e…… t a
r.

少女の語る言葉は、恥ずかしながら何処の国の言語かさえわからなかったけれども。

9 (後書き)

やっと登場人物が増えたら、言葉が通じませんでした。どうやってスムーズな会話に持っていくか……

「くしゅっ……うー寒い」

翌朝、いつもより早く目が覚めた。

まだ薄暗い初秋の朝方は冷えこむ。

うつほと私を隔てて焚いていた火は、すっかり冷え切っていた。

布団代わりの落ち葉の上から掛けていたぼろぼろのビニールガッパは結露し、周囲の地面もひんやりと湿っている。

うつほの中の少女は、よく眠っているようだ。

彼女を起こさないように注意しながら、手早く火を熾し、籠を背負って朝靄が漂う沢へと向かった。

痺れるほど冷たい水で顔を洗ってから、昨日仕掛けておいた罫を確認する。かかっていた魚は大小あわせて六尾。頭をヤナギの枝に貫いて環にし、腰から下げる。

大きな器に水を汲み、少々遠回りして、栗や安全だと判明した茸、柔らかいシダ、名残の木苺、お茶にして飲むための草などを道すがら採集して帰った。

ようやく差し込み始めた朝日の下、眠る少女の髪は温かな栗色だ。異国の顔立ちと見慣れない服装は辺りの光景と相まって、昔読んだ童話の中に登場する森の精霊のように見えた。

まるで挿絵から抜け出てきたかのような姿だが、昨日負ぶってここまで連れてきた重みと温度の記憶が、彼女が生身の人間であることを伝えている。

ぱちん、と大きな音を立てて、焚き火にくべた栗がはじけた。

その音で少女も目を覚ましたようだ。

しばし状況の把握ができていないようで視線をさまよわせていたが、私に目を留めると安堵したように微笑んだ。

今度は自然に笑みを返す。

「おはよう」

通じないとわかっていたが、思わず言いたくなって言ってみた。少女は首をかしげた後、頷いて何事か口にした。

私はその言葉を繰り返してみる。

少女はパツと顔を輝かせ、ゆつくりと発音してくれた。

次に繰り返すと、何とか及第点が出たようだ。

覚えたての『おはよう』を口にしながら会釈すると、彼女も真似をしてぺこつと頭を下げながら返してくれる。

その様子が可愛くて私が小さく吹き出すと、彼女にも笑いが感染する。なんとなくおかしくなって、二人でくすくすと笑ってしまった。

「なぎこ」

笑いが収まった私は自分を指すジェスチャーをして、名前を告げてみる。

今度はすぐわかったのだろう。

『ナギ…イコ』

私の目を見てやや言いにくそうに呼んだ後、少女は優美な動きで手のひらを自分の胸に当てる。

『エリカ』

発音しやすい名前でもよかった！

日本人の名前でも不思議ではないし、もしかしたらハーフなのだろうか。

「エリカ」

繰り返すと、そうそう！というようにコクコク頷いてくれる。何だこの可愛らしい生き物は。

夕べは二人とも落ち着いて食事をするどころではなく、ろくに食べない。

焼いた栗と魚、茸とシダのスープ、わずかばかりの木苺という簡単な食事だが、エリカはもの珍しそうにしながら食べてくれた。

食後に、痛みを緩和する作用があるヤナギのお茶を飲みながら、周りにあるものを手当たり次第指して、ゲームのようにお互いに名前を挙げていく。

文字情報も何もない環境で、知らず知らずのうちに情報に餓えていたのだろう。もともと暗記が得意ということもあって、私はエリカが教えてくれる単語を次々と覚え、彼女を驚かせた。

濡り潰した草を樹皮で固定していたシップを、エリカの脚からそと外す。

出会った時靴を履いていなかった彼女の柔らかい華奢な脚は、荊や草で痛々しく傷ついていた。

傷口から細菌が入ったのか患部が熱を持ち歩くこともままならなかったが、あれから三日が経過した今では、小さな擦り傷は残るものの腫れはあらかたひいているようだ。

『痛い、ない？』

私はジェスチャーを交えながら覚えてたの言葉でエリカに尋ねた。彼女は頷いて立ちあがり、

『もう痛くないわ』

と笑ってみせる。

そのまま歩きだそうとするのを手を挙げて止める。

『痛くない、良かった。これ、足、つける』

私は夜鍋して編んだ干草の草鞋もどきをエリカの足に括りつけた。不恰好だが、素足で地面を踏むよりはマシだろう。

案の定エリカは初めて草鞋を見たようで、不思議そうに足踏みを繰り返している。ナチュラルティストの服装と妙に調和しているのが微笑ましい。

片言と身振り手振り、地面に書く絵のみに頼った交流だったが、私はエリカの言わんとすることが三割がた理解できるようになっていた。彼女も私に伝えようと簡素な言葉を選んでくれているのだからうけれど。

とはいえ、まだ物の名前や動詞、簡単な言い回しが関の山で、や

はり細かいニュアンスや説明的な文章は理解できない。

なんとか彼女の事情を知ろうとお互い努力をしてきたが、私が知ることができたのは、エリカ・リムリスという名前と年齢は十二歳だということ、当たり前だが日本人ではないこと、スタンフォードという所から来たこと、そして自分の意思でここに来たわけではないらしいことぐらいだった。

家族に愛されているのだろう、父親や兄らしき人物について話すときエリカは少し涙ぐむ。

それでも、こんな子供なら泣きわめいてもおかしくはない不安な状況にありながら、微笑を見せる彼女の強さがまぶしい。

夜中に声を押し殺して泣くエリカの震える背をそっと撫でると、遠慮がちにしがみついてくる。

その温もりが、胸が痛むほど愛しかった。

庇護しているようであり、出会ったばかりの幼い少女に依存しているのは実は私のほうだ。

もはや私にとってエリカは生きる意味になっていた。

歩けるようになったエリカを伴い、私たちが出会った温泉へと向かう。

言葉で事情が理解できないなら、実際に現地へ行って状況を説明してもらったほうがわかりやすいと考えたからだ。

湯気で煙る温泉を見て、エリカは目を丸くしていた。傷にも良いだろうし帰りに一緒に入ってみようか。

私はどちらの方向を向いて湯に浸かっていたか思い出し、背後にあたる方向を確認する。

藪の一部が不自然に乱れており、膝まずいて掻き分けながら目を凝らして見ると、一人が辛うじて通れるほどの獣道に微かな足跡が残っていた。

『これ、歩く、来た？』

背後を振り返り獣道を指差して確認すると、エリカはこくりと頷く。

『道、わかる？』

と訊くと、困った顔をする。

それもそうだろう。傷だらけで転げ出てきた彼女の様子を思い返すに、そんな余裕はなかったに違いない。

雨が降って痕跡が消えてしまわないうちに、行けるところまで行ってみよう。

私は先になつてエリカが通りやすいよう道を作り、帰りのための目印をつけながら、ゆっくりと獣道を辿りはじめた。

11 (後書き)

次回グロテスクな描写がありますのでご注意ください。

12 (前書き)

グロテスクな描写を含みます。たいしたことはないかもしれませんが、苦手な方やお食事前後の方はご注意ください。

赤や黄色の葉が静かに舞い落ちる森を行く。

地面には枯葉が積もっており、エリカの足跡を辿るのは容易ではなかった。

数日前まではぬかるんでいたであろう今は固く乾いた土に残る指の跡や、荊に絡んだ数本の長い髪の毛、枯れ枝に引っかかる鮮やかな赤い糸、それにエリカが微かに覚えている特長的な岩や地形などを手がかりにし、慎重に獣道を進む。

私の後ろを転ばないよう俯きがちに歩くエリカは、口数が少ない。
『足、疲れた？』

と訊くと、ふるふると首を振って否定する。
病み上がりなのだ、無理をさせてはいけない。向き直って目を合わせ、無言でどうしたのか問う。

エリカは少し躊躇うようにした後、小さく何事か言った。ひどく怯えているようだ。

『怖い？』

たぶんこの意味で合っているだろうと身震いのジエステエーをしながら繰り返すと、肯定が返ってきた。

『何、怖い？』

私がそう尋ねると、エリカは幾つかの単語を並べた。私が理解していないのがわかったのだらう、身振りを交えながら繰り返す。両手を掲げて指を鉤状にし、喉を反らして吠えるような動作。

はっとした。彼女の身振りから察するに、私が幸運にも遭遇しなかっただけでこの森には凶暴な獣がいるのか。

『エリカ、見た、これ、ここで？』

と、私も獣の真似をしながら恐る恐る訊いてみる。できることから否定してほしい。

私の願いも虚しく、答えは是だった。

なんとということだろう。こんな丸腰の状態で獣と鉢合わせしたら、こちらに勝ち目はない。

思わず引き返したくなかったが、ここで戻っても状況に変わりはないことを考え思い直した。

新たな事実を知った今、これまで以上に一日も早く森を抜けなければならぬ。

武器になりそうなものなど黒曜石の小さな欠片しか持つておらず、うつほに戻ってもそれは同じだ。松明を持つとうにも、それこそ獣でも仕留めないことには大量の油など手に入れようがない。ならばこのまま手がかりが残っているうちに、少しでも情報を集めたほうが生き残る確立が高まるのではないだろうか。

せめてもの気休めに、目についた太めの枝の先端を削り携える。

いざとなったらこれで威嚇して注意をひきつけ、僅かなりとも隙を作ってエリカを逃そう。

仕方ない、遭遇したらそれまでだ。

歩き続けて窪地に出ると、何かを見つけたのかエリカが枯葉の吹き溜まりに駆け寄る。膝をついた彼女の前に皮でできた靴の片方らしきものがあつた。

ここしばらく手がかりらしい手がかりがなく不安だったが、確かに彼女はここを通つたのだ。傍らの地面には張り出した木の根が顔を出している。私の視線を辿つたエリカは、

『ここで転んだの』

と呟く。その両手は、先程拾つた靴をきつく握りしめている。

『わかる？どっち、来たか』

私の問いかけに彼女は少し考えた後、迷いなくある方角を指差し

た。

エリカの示した方向に進み、小さな流れを越えてしばらくすると、違和感を感じた。

腐葉土の臭い慣れた湿った匂いに混じり、微かにおかしな臭いがするのだ。

足を進めるにつれてそれはますます濃くなっていった。

ここに来てから絶えて嗅ぐことのなかったゴミ捨て場のような臭い。それも夏場に放置された生ゴミの汁が日に照らされたような腐臭だ。

脳がこれ以上近づくな、と警告音を発する。

後ろから上着の裾を引っばられ足を止める。

『行っちゃだめ』

エリカは真つ青な顔をしてがたがたと震えていた。足がすくんで動けないようだ。

目を閉じて耳を澄ませ、辺りの気配を確かめる。大きな生き物は近くにいない。エリカの手を優しく外し、努めて笑いかける。

『ここで、待ってて』

背後でエリカが何事かかすれた声で叫ぶのを耳にしながら、目の前の斜面を登る。

この先にあるものを、私は多分知っている。それでも大きな手がかりを見逃すわけにはいかなかった。

小さな斜面を登りきり、少し下った先にその光景はあった。

酸っぱいものが胃から込み上げてくる。

季節柄羽虫がたかっていることはなかったが、肉食の小動物に食い荒らされたのだらう、骨が露出した断面が群がる蛆や昆虫によって細かく波打っているのを間近で見ると、覚悟していたことながら

我慢できなかつた。

屍骸から顔を背けて地面に嘔吐しながら考えていたのは、場違いにも食べたものがもつたいたいという事だった。あんなに苦勞して食糧を集めたのに。

胃液しか出なくなるまで吐いてから、何とか気をとりなおして正視する。

横たわっている屍骸は二体。一体は人間、もう一体は獣だった。

変色した血が大量にこびりついたぼろぼろの獣の毛皮は、かつて灰色であつたらしい。体長は大人の背丈ほどで、血に染まつた口元からは鋭い牙が覗いているのが判別できた。

その姿は、かつて小学校の遠足で見た狼に酷似している。しかし二ホンオオカミはとくに絶滅したはずだ。これはやはり大型の野犬なのだろう。

もう死んでいるとはいえ、背筋が寒くなった。犬、特に野犬は私が唯一大嫌いな動物なのだ。

次に、うつ伏せで半ば獣の下敷きになっている男を検分する。こちらの死因は明らかだった。背後から押し掛かつた牙が半ば首筋に埋まつている。手には血脂に曇つた大振りなナイフを握つたままだ。この状況を鑑みるに、とどめを刺したと油断した男が背を向けたところ、最後の力を振り絞つた野犬に背後から襲われたというところだろうか。

彼が何者かは不明だが、エリカと関わりがあることは間違いない。

えずきながら大柄な男を獣の下から苦勞して引つ張り出し、仰向けにする。下敷きになっていたことで胸から下の損傷は比較的少ないようだ。

とりあえず手を合わせてから懐を探ると、口を縛つた皮袋が幾つが出てきた。一番大きな袋には、ビーフジャーキーのような干し肉とシリアルバーを圧縮したような固い食品が入っている。問題なく

食べられそうな状態だ。他の袋の中身は、金属の小さな板と石、小さな壺に入った固形の脂らしきもの、くすんだ金色のブローチなど。携帯電話や地図を持っていないかと全身を調べたが、それらはおろか財布すらなかった。

それにしても、変な格好をしている。血と泥に汚れて定かではないが、男は粗いホームスパンのような毛織のズボンを着き、同じような生地はやけにざっくりとしたカットの裾が長い上着を着ていた。腰にはエリカのものほどには繊細でないにせよ、刺繍の入った布帯を巻いている。

私は流行にうといが、こんな格好をしている人を見たことがない。エリカを除いて。

そうだ、エリカのところに戻らなくては。

追いはぎのようで申し訳ないが、死者に荷物は必要ない。男の手からナイフを引き抜き、布袋を一つにまとめて手にする。枯葉なりとも上からかけて埋葬すべきだろうかと考えていると、斜面のすぐ向こうで声がした。

駆け上がり、顔を覗かせようとしているエリカの頭を抱え込んで視界を塞ぐ。こどもが見るべきものではない。

小さく抗うエリカを半ば持ち上げるようにしながら、屍骸が見えない場所まで連れて行った。

エリカはまだ戻ろうともがいている。私は抜き身のナイフを持つたままなので、危ないことこの上ない。

ナイフと一緒に持っていた皮袋もろとも地面に投げだした拍子に、袋の中身が散らばった。木漏れ日に金のブローチが光る。

腕の中のエリカが急に大人しくなり、吸い寄せられるようにブローチを手にした。震える手で留め金はずす。内部はロケットになっていたらしく、人物の絵らしきものが見えた。

そのままブローチを胸に押し当ててすすり泣いていた彼女は、し

ばらくして涙を拭いながら

『ごめんなさい』

と謝った。

ブローチについて訊くべきかどうか迷ったが、今は触れないことにした。

エリカ本人が話してくれるまで待とう。

それよりも日が落ちかけてきたことが気になる。懐中電灯は一応持ってきているが、夜行性の動物が活動を始める前にねぐらに戻りたい。

『あれ、知ってる人？』

私は屍骸のある方角を指して尋ねる。

エリカの表情は複雑だった。一緒に来たが知らない人だと言っているようだ。

身内ではなかったのか。

辿ってきた足取りの手がかりも途絶えており、この地点までどの方角から来たのかということもわからなかった。どうやら目隠しをした状態で連れてこられたらしい。

ということは、もしかしなくても誘拐！？

訊きたいことは山ほどあったが、やはりここでも言葉の壁が邪魔をする。

遠くで獣の鳴き声がして、二人同時にびくつとした。

今日のところは出直して、また明日探索を続けよう。

帰り道は道しるべをこまめにつけていたので、小一時間ほどで戻ることができた。

その晩食事の後、焚き火にあたりながら改めて事情を聞き出す。

目隠しをされ連れてこられたので、今日の屍骸発見現場までの道のりはわからないこと。

獣に襲われて誘拐犯と二人乗りしていた乗り物から振り落とされたこと。

拘束が緩んだすきに無我夢中で逃げてきたこと。

誘拐された理由は本人もよくわからないこと。

これだけのことを認識するのに多大な時間と労力を要し、エリカと私はぐったりしていた。

理解力がなくてごめん。

件のブローチは今、ストールの留め具としてエリカの胸元で光っている。

彼女は不安をなだめるようにそれを固く握りしめていた。

私の目線に気がついたのだろう、大切なものを扱う手つきでブローチを外し、そっとこちらに差し出す。

『見ても、いいの？』

彼女が首肯するのを確かめてから、繊細な彫金がなされたロケットの蓋を慎重に開いた。

昼間ちらつと見えた女性の肖像画は、こちらを見て包み込むような笑みを浮かべている。

絶世の美人というわけではないが、片手に納まるほどの小さな絵ながら内面の美しさがよく描きだされている。

髪や瞳の色こそ違ったが顔立ちにエリカと似通ったところがあり、血縁関係があるのは明らかだった。

そういえば、エリカは父親の話はしたが母親については触れなかった。

目顔で問うと、彼女は肖像画に目を向けたまま言葉を発した。

多分、母という意味だ。

『お父さんと、オカアサンの、こども、エリカ？』

ブローチの隣に手で人型を描き、次いで肖像画を指差し、二点を結びつけるように辿って最後にエリカを指差す。

切なげな微笑がその答えだった。

おそらく彼女の母は既に鬼籍の人なのだろう。

ほんの数日共にいただけだが、エリカは年齢にそぐわず驚くほど健気で我慢強い。

その微笑を見て、何とはなしにその理由の一端を知った気がした。

『お母さん、きれい。エリカ、きれい。よく似ている』

ブローチを返しながらの私の言葉に頬を染めてはにかむしぐさは、ごく普通の幼い少女のものだ。

この笑顔を守りたい。

熾火に浮かび上がるエリカの寝顔を眺めながら、私は決意を新たにした。

13 (前書き)

やっと始まりの終わりといったところですが、殺陣っぽいものがあります。ですが生暖かい目でご覧ください。

明けて翌日。

私たちは今日こそ森から脱出ルートを見つけるべく、朝から探索の支度に追われていた。

昨夜の話によると、エリカは途中まで何らかの乗り物で連れてこられたようだ。相当の距離があるとみていい。

探索の距離が伸びれば暗くなるまでにうつほのあるこの場所まで帰りつけない可能性もある。そのため、いざとなったら野宿もできるように装備を整える必要があったのだ。

とはいっても私が持っていたビニールガッパ、懐中電灯、タオル、壊れた腕時計と、ここに来てから手に入れた黒曜石の小さなナイフ、火熾し用のホクチ、木の椀や籠、ロープ、蓄えた干し魚や木の実、それに誘拐犯から失敬した刃物と食糧、脂、火打石と火打金といういささか頼りない品々だったが。

それらを地面に並べ、ひとつひとつ確認しながら負い籠に入れていく。

最後に焚き火の燃えさしに土をかぶせて踏みつけ、完全に消火したことを確かめれば準備完了だ。

『準備、できた？』

『ちよつと待つて』

エリカを見ると、草鞋の紐を結ぶのに苦戦しているようだ。傍らの岩に腰掛けるように促し、きつすぎずかといって緩まないように結びなおしてやる。

『ありがとう、ナギ』

凧子という名が発音しにくいようで、エリカは私のことをナギと呼ぶようになっていた。

多少違っただけでも、自分の名を呼んでくれる人がいるというのは嬉しいものだ。ここ数年来絶えてなかったことなので、ちょっとこそばゆいけど。

じゃあ行くのが、と立ち上がるうとしたとき。

私のものでもエリカのものでもない押し殺した声を聞いた気がした。

はっとして意識を広げると、十五メートルほど離れた木の陰に、異質な気配がひとつ、ふたつ。

『ナギ？』

『しーっ』

エリカがいぶかしげにこちらを見る。

『あそこ、誰か、隠れている』

耳元で囁くと、彼女は身を固くした。

片手でエリカの肩を押さえながら、籠から刃物を取り出し見当をつけた方に向けて構える。

途端、辺りの空気が一変した。

姦しく騒ぎながら焚き火跡で餌を奪いあっていた椋鳥たちが、異変を察したのか我先に飛び去っていく。

一拍置いて、男たちがこちらへ向けて飛び出してきた。

「逃げて！」

思わず日本語で叫んで後ろ手にエリカを押しやり、背後を隠すように立ちはだかる。

手足が震えるのを叱咤し、両手で刃物の柄を握って胸の前で水平に構えた。

日本刀のように長い刃物を携えた大男が、間合いをはかるようにじりじりと近づいてくる。

視界の端には弓を持った男がアーチエリーの的を狙うようにこちらに向けて矢をつがえているのが見えた。

エリカは逃げただろうか。

彼女の国の言葉で、逃げるはと言うんだっけ。

体が勝手に後ずさりしようとするのを必死で堪える。

いや、もはや体が竦んで動けないのかも。

永遠にも思えたが、実際は数秒の間だったのだろう。

ごくりと喉を鳴らした瞬間、上段に振りかぶった男が一気に間合いを詰め打ち込んできた。

エリカの悲鳴が聞こえる。

反射的に体が転がった。

斬撃が地面を噛んで止まる。

足をもつれさせながら起き上がると、別の男がエリカめがけて飛び出そうとしている。

『逃げて！』

やっと思い出した単語をわめきながら体ごと男に突っ込んでいく。

肉を裂く嫌な感触。呻き声。

そのまま倒れこむかと思われた男は、しかし低く呻きながら私の足を払い右手首をひねりあげた。

痛みを耐え切れず手放した刃物を奪い、素早く私の首筋に擬する。

『逃げて……』

エリカが繰りかえし何事か叫んでいる。

次いで動物の啼き声がし、強い調子の男声が響いた。

首筋に食い込んでいた刃先が消え、押し掛かっていた重みが退く。

目を開けると、茶色い髪をした壮年の男性にエリカが駆け寄り抱きつく光景が映った。

二人はそのまま固く抱きあっている。

エリカがこちらを見て、泣きながら満面の笑みを浮かべる。

それに微笑み返ししながら、終わったのだ、とただ思った。

世界が色を失う。

聴覚が歪み、視界を黒い斑点が覆い尽くしていった。

13 (後書き)

お気に入り登録してくださった方が、二百人を越えました。ありがとうございます！！

花冷えとはいえ風のやんだ午後の陽だまりは暖かく、待ちわびた季節が巡ってきたことを告げていた。

見飽きた冬空とは違った柔らかな光に自然と心が浮き立つ。

それは園庭をところせましと駆け回っている他のことも達も同様で、そここではしゃぎ声が聞えてくる。

窓越しにその歓声を聞きながら私は絵本を読み聞かせていた。

「さて、えものはおらんかな……」

ページをめくろうとして相手の様子を伺い、苦笑して手を止める。いつもなら熱心に聞き入る目の前の少女は気もそぞろだ。楽しげな外の光景が気にかかるのだろう、風邪をひいて先生から外遊びを止められている彼女はこども達を羨ましそうに目で追っている。

私が声をかけようとしたとき、

「みほちゃん！」

滑り戸を開けて小柄な少女が駆け込んできた。満面の笑みを浮かべ頬は上気している。

「どうしたの、かなちゃん」

窓際のベッドに腰掛けたパジャマ姿の美穂は細い首を傾げる。そんな彼女に向かって加奈子は大切そうに握りしめていた右手をそつと開いてみせた。

ぷっくりとした手のひらには桜の花弁がひとひら。

「きれい……」

「わあ、桜だね」

私達の反応に加奈子は嬉しそうだ。

「あのね、ひらひらってお空からふってきたの。みほちゃんにあげるね」

「もらっていいの？ありがとう！」

にこにこと笑っている幼い少女達の愛らしさに私も笑みを誘われた。

「ねえ、なぎねえちゃん」

「なあに？」

「これ、どこからきたのかな」

この近くでは今年まだ桜を見ていない。私達の通う小学校の校庭に植わっているソメイヨシノも、昨日の時点では開花までもうしばらくかかりそうな様子だった。

「たぶんお山のほうから来たんじゃないかな」

指差した窓のむこう、こんもりとしたお椀型の山並みには植林されたスギやヒノキの緑に混じり、ところどころ水をたっぷり含ませた筆で刷いたように山桜特有の淡い色がぼやぼや滲んでいる。

「あのピンクのがぜんぶさくらなの？」

美穂が目を丸くして尋ねる。

「うん、そうだよ。このあたりに咲くのはちよつと違った種類だけだね」

「ちかくで見てみたいなあ」

窓に手のひらをつけて山のほうを眺めている美穂に対して、加奈子は珍しく静かだ。

「加奈ちゃん？」

私はいぶかしく思っただ顔を覗きこむ。彼女はくすくすと笑い、

「なんでもないよ！」

と言っただ部屋から去っていった。

残された美穂と私は顔を見合わせる。

「なんだろうね」

台所から水を入れた小さなガラスの器を持ってきて、桜の花弁を浮かべ窓辺に置いてやる。光を通して美しいそれを美穂は飽きるごとなく眺めているようだった。

この季節の門限である五時半に近づいても加奈子が帰ってこない。多少日が長くなったとはいえもう太陽は山の向こうに隠れつつあり、山里の空気は冷たい。心配する私に園長先生が苦笑する。

「よく山で迷子になって散々気を揉ませた凧ちゃんと同じ子とは思えないわね」

私は黙ってごまかし笑いをするしかなかった。言われるとおりなので反論のしようがない。

しかし、彼女以外のこともが全てそろってもまだ帰ってこない加奈子に先生達も不安を隠せない様子だ。六時になり数名の先生が探しに出かけた。

残った先生達も他のこともに心当たりを訊いている。

「わかんない、でも明るいうちに外に出ていったよ」

「どこいくのって聞いたらひみつだっていつて教えてくれなかった」「いいもの探りにいくんだって」

いいもの……

桜の花弁を大切そうに握りしめていた加奈子の姿が浮かぶ。もしかして。

「先生、私ちよつと探してきます！」

止められるのも聞かず門を飛び出した。

夕暮れのあぜ道を走って走って山裾へ辿りつき、脇腹が痛むのを堪えながら丸木で足場が組まれた遊歩道を駆け上がる。時折立ち止まって声を限りに加奈子の名を叫んでは耳を澄ませ、また次の角まで。数回目に叫んだとき、横手の草地から声がした。

「加奈ちゃん！」

ベソをかいた加奈子が飛びついてくる。手には折り取った山桜の枝を掴んでいた。白いタイツをはいた膝に泥がつき少し血が滲んでいるが大きな怪我はないようだ。

「ばか、心配したでしょ」

無事でよかった。

足から力が抜け、私はせいぜいする息をもてあまし加奈子の肩を持ってしゃがみこんだ。

山道を下り、夕闇のなか園へと帰る道すがら加奈子は私の背中中、「みほちゃんにみせてあげようと思ったの」

としゃくりあげながら繰り返す。桜の枝をとったはいいが、暗くなって足元がよく見えず転んでしまったらしい。

私は高学年、加奈子は昨年小学校にあがったばかりとはいえ、やはり長距離を負ぶって歩くと重みがこたえ、それは自然と足どりにもあらわれる。

「なぎねえちゃんごめんね、おこってる？」

と涙声の加奈子に、息が上がるのを抑えつつ怒ってないよと答えようとしたとき、背後から低いうなり声がした。

恐る恐る振り返ると、ぽつんと一つある街灯の光のもと、薄汚れた毛並みの大型犬が牙をむいてこちらを睨みつけているのが見えた。食い込むほどきつく絞まった首輪に繋がった鎖は引きちぎられて地面を這っている。

じりじりと後ずさりする私達をなぶるように野良犬はうなりながら近づいてくる。

足が竦む。

ああ、早く逃げないと。

私のせいで加奈子が。

野良犬が跳躍する。

はやく、はやくにげないと……

声にならない叫びをあげながら飛び起きた。

「っ……っ」

あの夢を見たのは久しぶりだ。

一瞬の後、くらくらする頭の重みに耐えかねて背後に倒れこむ。ぼふつと沈む柔らかな枕と肌をすべるさらさらしたシーツの感触。日向の匂いに混じりほのかなグリーン系の香りがするのが心地よい。外は明るいようだが今何時だろう。掛け布団に顔をうずめたまま体をひねり、夢現で枕元の携帯電話を求めて手探りする。

……目一杯伸ばしても畳に手が届かない。私の布団のサイズから考えてありえないことだ。

布団！？

今度こそ完全に目が覚めた。音を立てて血の気が引くのを感じる。

ここはどこだ？

身を起こし慌てて辺りを見渡す。

私のアパートの部屋を三つぐらいつなげた広さの部屋だった。背後の窓には厚手のレースカーテンがひかれ直射日光を遮っているが、すき間から漏れ出る光量が今が昼間だと告げている。窓に程近い壁際には小さな机とクローゼット、覆いがかかった鏡台らしきものが据えられていた。

私から見て対角線上のスペースには丸いローテーブルと布張りのソファアが二脚あり、そちらの壁際にも窓があるようだ。

私が今身を起こしているベッドはどんなに寝相が悪くても転げ落ちそうにないほど広い。今は開け放たれているが頭上からは蚊帳のような薄布が吊るされており、病院のベッドのように閉められるようだ。ベッドサイドにある木製の小机には小さなランプとコルクで

栓がされた白い陶器のボトルにコップ、ラベンダーの花が生けられた花瓶が置いてあった。

ベッドの足元には背の高い衝立があり視界が遮られているが、部屋の構造からするとこの向こうにドアがあるのだろう。

部屋を観察するうち肩から力が抜ける。ここがどこかわからず、病院の個室のようにもホテルの一室のようにも到底見えなかったが、なぜか警戒心は芽生えなかった。

私を傷つけたり拘束する意思が全く感じられないせいかもしれない。部屋の雰囲気からはむしろ労わりやもてなしの気遣いが伝わってきた。

自分が身につけているものが見慣れないネグリジェだと気がついたときには少々焦ったけれども。

しばしばーっとしていると衝立の向こうからノックの音がした。

「はいっ」

思わず裏返った声で返事をしてしまう。

ドアが開き、足音が衝立を回り込んできた。現れたのは大柄な女性だ。茶色のワンピースに包まれたふくよかな体を、たっぷりとしたエプロンで覆っている。

彼女は私の顔を見るなり矢継ぎ早に何事か喋りながらぬつと手を伸ばしてきた。思わず避けようとしたが有無を言わずがっしりと肩を掴まれ、額に手をあてられる。硬直した私をよそに満足したようにうなずきながら手を引くと、更に話しかけてきた。ヒアリングが追いつかないが、大丈夫かと訊かれているようなのでとりあえずこくこく頭を縦に振っておく。

声を出そうとした拍子に私が咳き込むと、ベッドサイドのボトルから注いだコップを渡してくれた。促されるままに口にしてひどく喉が渴いていることに気がついた。両手でコップを持ち夢中で水を飲むと、鼻腔から微かな薄荷の香りが抜けていく。

ぶはっつとビールをあおるオヤジのように息をついた私の頭を大き

な手で撫で、女性は部屋を出ていった。

静かにドアが閉まる音を聞きながら呆然と頭に手をやる。すごいパワーだ。

しばしの後またドアが叩かれた。私の返事に応えて軽い足音が続き、エリカが駆け寄ってくる。

『ナギ！目が覚めたのね。よかった』

エリカは目を潤ませながら飛びついてきた。顔色もよく元気そうだ。

『エリカも、無事でよかった。ここ、どこ？』

見知った人を見て私は不安な顔をしていたのだろうか。エリカは手を握り、こちらの顔を覗きこみながら噛み砕くようにゆっくりと喋ってくれた。

『ここは、私の家よ。スタンフォードの。あなたが気を失っている間にここに連れてきたの。ひどい熱を出していて二日間眠っていたのよ。』

まるで今までと立場が逆転したようだ。

『エリカの家？お世話に……ありがとう。心配させる、ごめんね』
それでスタンフォードって、と続けようとしたときドアの外で声がした。エリカはちょっと待ってねと言いおいて離れていく。

いつまでも病人のようにベッドにいる訳にはいかないので、とりあえず掛け布団をのけて足元に畳む。ベッドの下に部屋履きがあるのに気がついて拝借することにした。内側がふわふわしていて素足に気持ちいい。

窓に歩み寄りカーテンを開けると陽光が差し込んできた。内開きのガラス窓を開放して身を乗り出すと涼しい秋風が頬を撫でる。大きなトンボが青空に舞っているのを見つけ思わず手を伸ばしたが、ついつと風に乗り遠くへ行ってしまった。

「あーあ」

トンボの行方を目で追っていると下の方からくつくつと笑い声が出た。視線を落とした先は向かいの建物を挟んで中庭になっており、おじさんが地面についた鍬にもたれて立っていた。彼は私と目が合うと被っていた帽子を脱いで会釈する。

こちらでも愛想笑いを浮かべて会釈を返した。どうも、いい年してとんだところをお目にかけてまして。

『ナギ？』

振り向くとエリカが立っていた。隣には先程の大柄な女性がいる。女性は顔をしかめてつかつかとこちらに近づいてくると私の腕をそっと掴んで窓辺から退け、窓の向こうを睨んでからカーテンをしゃつとひいた。目を白黒させている私にエリカは苦笑している。

『ナギ、服を着てないでしょう。これに着替えて』

今までのサバイバル生活でそんな乙女心すっかり失ってました。

羞恥心、大事だよな。

『……ありがとう』

年下の子にこんな注意されるってどうなんだと思いつつながら、木のたらいに注がれた水で顔を洗う。

受け取った服はエリカのものと同様の形式だった。ちょうちんブルマー一步手前の下着と生成りの長いスリップの上から、葡萄色をした厚地の長袖ワンピースを着込む。上身ごろは編み上げになっているが、紐をきつく締めてもまだぶかぶかしていた。それを見た女性があまたも早口でまくし立てる。助けを求めてエリカを見ると、女性の言葉に同意しながら、

『マギーが、しっかり食べてもつと太らないとだめだって言っているわ』

と通訳してくれた。その表情は自分も賛成だと言わんばかりだ。

マギーさん。痩せたのは確かにそうだけど、胸がないのはもともとなのですか。

次に渡された大判のシヨールと布帯は、エリカが身につけるのを観察していたのでどうするのか知っている。

ベッドの上に布帯を伸ばして垂直方向にシヨールを広げ、ワンピースの裾よりちよつと短めになるよう調節しながら仰向けに寝転がる。シヨールの下の布帯を脇から手繰り寄せ、浴衣を打ち合わせるように腰周りを締めてやや脇より前に前で結ぶ。慎重に起き上がった帯の形を整え、裾が広がるように開けば完成だ。帯より上の部分は頭から被ったり肩にかけたり、そのまま垂らしたりと応用が利く。シヨールは落ち着いた臙脂色、帯は黒地に緑色で鳶を模した刺繍が施されていた。

私がシヨールを後ろに垂らしたままにしていると、マギーさんが背後からそれで肩を包むように掛けてくれる。

『熱が下ったばかりなのに、体を冷やしてはいけません』
ゆっくり話してくれれば聞き取れる。

『ありがとうございます』
振り返ってマギーさんにお礼を言っているとエリカに呼ばれた。

『少し屈んで？』

言われたとおりにすると、私の胸元に手を伸ばしシヨールを留めてくれる。うつむいてしげしげと見ると、葡萄の房と葉を象った力メオのブローチだ。葉の部分には雫を表現しているのだろう、透明な宝石の粒が嵌められている。金で縁取られた細工は素人目にも精緻で、値の張るものであることは明らかだった。

『きれいだけど、こんなに……いいもの、借りられない』

宝飾品の類は身につけたことがない。傷つけでもしたら大変だ。思わず外そうとしたがエリカはその手を押し留める。

『ナギに持っていてほしいの。その服にも似合うわ。おねがい、貰ってちょうだい』

エリカの目は真剣だ。本当に貰っていい物なのかわからないが、後で親御さんにも訊こう。だめだったらこっさり返してもらえば

いい。

『ありがとう』

エリカは花が咲くように笑った。

3 (前書き)

書き遅れましたが、残酷描写の注意書きをつけました。今更ですがご報告まで。

身支度が整い、ミルク粥のようなものを少しいただいた後、部屋の外へと促された。エリカの父であるこの屋敷の主が面会を希望しているという。

あれこれと手間取ってすっかり待たせてしまったのではないだろうか。恐縮する私にエリカは、目が覚めたという知らせを聞いて部屋まで来ようとする父を止めて、身支度を済ませ落ち着いてから私を連れて行くと言い置いたので問題ないと説明した。

先導するマギーさんの後ろについて板張りの廊下を歩く。私が居た部屋の向かいの並びにはドアが一切なく、白く塗られた壁のところでどこかに設けられている窓から日光の帯が投げかけられていた。

視界の端をやや高い位置で流れる窓を、通り過ぎながらちらちらと横目で眺める。目を引いたのは高く澄み渡る青空にちぎれ雲。対して地面はというと、森の風景に慣れた目には最初何もないように映った。うっそうと茂って視界を遮る木々はほとんどなく、僅かな起伏を繰り返す枯れ草色の地面が延々と続いている。丘を縫うように細い川が横たわり、よくよく目を凝らすと僅かな木々が点在するそばにミニチュアのような家々と畑らしき土地がぼつりぼつりあった。丘の上に向かって白い家畜らしき群れを追っている人の姿もある。その光景は、いつかテレビの紀行番組で見たイギリスの荒野にどこかしら似ていた。

幾度となく胸をよぎった不安がまた顔を覗かせる。見慣れない土地、人々、言葉。これらが意味するものは？

『こちらです』

マギーさんが通路を右手に折れる。行き過ぎそうになり慌てて後

に続いた。方向を変えた拍子に、磨きあげられた廊下を柔らかい皮のショートブーツがきゅっと鳴らす。ちらつと見えた別の通路には階段への入り口があった。

今進んでいる通路は渡り廊下になっているようで左右に扉はない。ガラスではなく蔦を模した格子が嵌まっている右手の窓からは先程の中庭が見える。見下ろした高さから考えてここは二階なのだろう。左手側も同じく中庭になっているようだが、畑のようだった右手の庭とは違い、立体的に構成されたのがわかる華やかな造りだった。

廊下の内壁には等間隔でランプが据えられている。今は点火されていないが、芯の上端はきちんと切り揃えられホヤもよく磨きこまれているのにも関わらず日常的に用いられていることが覗えた。背面を覗いたが電気コードの類は一切見つからない。

『どうしたの？』

無邪気に尋ねるエリカに曖昧に微笑んで答えを濁す。

案外ここは北海道のどこかで、スタンフォードというのも動物王国的なテーマパーク名かもしれないじゃないか。我ながら全く信憑性のない仮説を立てて無理やり気を紛らわすことにした。

例えあとわずかで破られる安穩だとしても。

渡り廊下が終わり、突き当りを左に進む。閉まったドアが左手に幾つか並ぶのを通り過ぎ、行き止まりに程近い一室の前で立ち止まった。マギーさんが扉の横に掛けられている金具を握り控えめに四回打ちつけると、室内からはつきりとした男性の声で応えがある。次いで開錠音がして内側から扉が開いた。エリカが繋いでくれた手を大丈夫、というように一旦強く握り返して放し、マギーさんを残して二人で室内に入る。

書斎らしく壁面の一つが大きな本棚になっており、奥には頑丈そうな木の書き物机が据えられていた。部屋自体の広さは私が寝ていた部屋と同程度だったが、左右に続き部屋らしき扉がある。

窓に向かつて立っていた男性がこちらに振り返る。やはり、あの日エリカと抱き合っていたこの人が彼女の父親だったのか。深い茶色の髪と顎鬚に藍色の目をしている。肖像画の女性は金髪に灰色の目をしていたので、どうやらエリカは父親似のようだ。

男性は腕を広げてこちらに近づいてくると私の手を両手で握った。『娘を助けてくれてありがとう』

力強い手とこちらを真っ直ぐに見据える眼差し、威厳がにじみ出る姿に吞まれてしまいそうだ。

『お父様、こちらがお話したナギよ。ナギ、こちらが私の父、キアン・リムリス』

エリカが私の背に手を添えて紹介してくれる。

『はじめまして、ナギコ・キヨハラと申します。ナギと呼んでください』

さつき歩きながら何度か練習した自己紹介をなんとか淀みなく口にする。

この言語は英語とは異なるものの、文法が似ている。単語の中にも英語と近いものもあり、ある程度慣れれば会話を組み立てることができた。タイムマシンがあつたら、英文学の翻訳家になるのが密かな夢だった中学時代の自分の肩を、その努力は無駄ではなかったと叩いてやりたい。こんなところに繋がってくるのだから人生わからないものである。英語と似ていても中には用法が異なったり真逆の意味だったりする単語もあるので注意が必要だが、女性名詞とか男性名詞とかややこしいものがないだけ良かったです。

『では、ナギと呼ばせてもらおう』

リムリス氏は破顔して私達を応接スペースに導きソファアを勧めると、自らも向かいに腰掛ける。

『リーヴ』

『はい』

先程扉を開けてくれた男性が心得たように盆を手にして現れ、テ

ーブルに磁器の茶碗と焼き菓子、サンドイツチなどの皿を手際よく並べた。

流れるような所作に思わず見とれてしまう。五十代後半と思しき男性はきれいな白色をした頭髪を撫でつけ、リムリス氏のものよりやや裾の短い衿の詰まった地味な色の上着をきつちりと身につけている。ショールを纏っていないので、そこだけ鮮やかな布帯の刺繍がよく見えた。目は黒くどこかアジア風の顔立ちをしている。

『起きたばかりのところを、急に呼びつけて申し訳なかった。お腹が空いているだろう。遠慮なくどうぞ』

リムリス氏は簡潔な言葉を選んで私に勧めると、エリカにも促してお茶やお菓子を口にする。私が食べやすいようにとの気遣いだらう。

先程食べたミルク粥で目覚めた胃が思い出したように猛烈な空腹を訴え、お言葉に甘えて目の前の皿に盛られた小ぶりのサンドイツチに手を伸ばした。一口かじると、舌の付け根からじゅわっと唾液が湧き出てくる。やや酸味のある固めのパンに白いチーズと塩気のあるハム、野菜がたっぷり挟まれたサンドイツチが、身震いするほど美味しい。思えば遭難してから肉を一切食べていなかった。

噛み締めながら無言で身悶えていると、エリカが横から焼き菓子を差し出してくれる。マドレーヌのようなそれを二つに割ると、甘い香りと卵色の断面が食欲をそそった。頬張るとふわふわした食感と甘みが口いっぱいに広がる。とても美味しいが粗食に慣れた舌には甘い。とにかく甘い。流し込もうとすすった熱いお茶は薫り高く、湯気で視界が滲んだ。

半泣きになりながら食べる私、せつせとお菓子やパンを勧めるエリカ、素晴らしいタイミングでお茶を注ぐリーヴさん、それを眺めるリムリス氏という奇妙な図がしばし続いた後、沈黙が訪れた。なおも注がれようとしたお茶を丁重にお断りし、頭を下げる。

『ありがとうございます。……食事も……素性が知れない私を助

けてもらったことも。それと、勘違いしてしまつて、ごめんなさい。私が……刺した人は、無事ですか』

一瞬あつけにとられたような顔をした後、リムリス氏が口を開く。『礼を言うのも、謝るべきなものもこちらのほうだ。エリカが顔をよく知らない者を先に行かせたのが悪かった。血気にはやった若者が先走るのは考えてしかるべきだったのに。ナギ、あなたは刃を向けられたことなど、ましてや人に向けたことなどなかったのだろう？ エリカから色々話を聞かせてもらった。その話と、出会って間もないエリカを身を挺して守ろうとしてくれたことから、親である私があなただを信用するのは当然だ。素性がどうあれ、どういふ事情を抱えているにせよ、その信用が揺らぐことはないよ』

ゆっくりと語られる言葉は温かい。涙腺が緩みそうになるのを必死で堪えた。

『ナギ、私も同じよ。もつと早く父の手の者だと気づけていたら、あなたにあんな思いをさせずに済んだのに。本当に申し訳なく思っているし、いくら感謝してもし足りないわ。森の中であなたに助けられた時どんなに心強かったか。今度は私があなただを助けたいの。私にできることならなんでも言つてちょうだい』

あれは私の自己満足なのだ。エリカが罪悪感を抱くことはない、と言いたかつたが言葉にならなかつた。

『心配しなくてもあの男はびんびんしているよ。もともととても丈夫な質なのだ。彼らこそあなたに謝りたいとしきりに言っている。エリカを思つてしたことだが、責任は雇い主である私にある。充分反省させるのでどうか許してやつてくれないだろうか。』

そう言つてリムリス氏が立ち上がり頭を下げるので慌てた。必死で言葉を搾り出す。

『あやしい者を……警戒するのは当たり前ですし、私が先に刃を向けたのですから。仕事に……真面目、なのです。私の首、少し血が出ただけですが、私は、あの人の、お腹を刺してしまつた』

手に伝わってきた肉を裂く感触を思い出し慄然とする。青ざめる

私の背をエリカが黙って抱きしめてくれた。

『……すまない。あなたの言葉を聞いて彼らも救われるだろう。落ち着いたらぜひ会ってやってくれないか。無事な姿を見れば気に病むことはないとわかるはずだ』

リムリス氏の言葉に頷く。ぜひ。顔を見て謝らないと気が済まない。

『森にいたとき、ナギと一緒にご飯を食べて仲良くなれたから、お父様とも打ち解けられるかと思ってお茶を用意してみたのだけど、どうだったかしら？』

沈んだ空気を打ち消すようにエリカが茶目つ気たつぶりに言う。
なんていい子なんだ。

『ばつちり。仲良くなりましたよね、えっと……ミスター・リムリス？』

私も冗談めかして言ったつもりが、一瞬ぴきつと空気が固まった。
え、何かまずい事言った？

一番固まっていたのは背後のリーヴさんだったが、いち早く石化を解いてリムリス氏の側に回りこむ。素晴らしい職業精神だ。

『お茶をもう一杯いかがですか、ミ・ロード？』

私の失言をフォローするかのよう、何事もなかった風にティーポットを掲げる。

『……ああ、貰おうか。ありがとう』

それに応じて口元に持ち上げたままだった茶碗をソーサーに下ろすリムリス氏。

『リーヴ、私にもちようだいな』

エリカまで。

『ミ・ロード。閣下って……貴族だったのか！紹介のついでに言うてくれ！』

『ナギ、仲良くなったことだし、キアンと名で呼んでくれてもいいんだぞ。なんならお父様でも』

平静さを取り戻し、お茶を飲みながらばちんとウインクするリムリス氏もといロード・スタンフォード。

閣下、その気遣いが痛いです。

3 (後書き)

作中の貴族等にまつわる敬称その他は一応イギリスのものをモデルにしていますが、大層いいかげんですのでご了承ください。どうしても許せん！という方のつつこみや、その他感想、ご指摘もお待ちしております。

『失礼しました……』

恐縮して小さくなる私にスタンフォード卿は苦笑する。

『気にすることはない』

微妙に気の抜けた雰囲気になった後、ところで、とスタンフォード卿が姿勢を正した。自然と私も背筋が伸びる。

『ナギも森から抜ける道を探していたと聞いたのだが。あなたはど
ういった……であそこに？詳しく話してもらえれば力になれるか
もしれない』

本題が来た。

『それが、自分でもよくわからないのですが、気がついたら森に居
たんです』

そうとしか言いようがない。

『気がついたら？記憶を失くしたのか？それとも、あなたも何者が
にさらわれたということか』

訝しげだ。もどかしくてたまらない。どうやって説明すればいい
んだろう。

『いえ、なんとさえばいいか。一月半ほど前、雨と風、がすごく強
い日で。家の外に出たら、カミナ……空がこう、ゴロゴロピシャー
ン、と光って、足元が崩れた、と思ったたら気を失っていたんです。
目が覚めたら、森でした。周りの土、乾いていて、私だけ濡れてい
たので、そんなに時間、経っていません』

必死の説明にも関わらず、部屋の隅に静かに控えているリーヴさ
んも含めて全員訳がわからないといった顔をしている。会話が不自

由なせいもあるだろうが、もし完全に通じても大差ないだろう。なにしろ私自身が理解できないから。

『では、大風で飛ばされたということ？そんな不思議な話は初めて聞いたわ。よく助かったわね』

目を丸くしてエリカが言う。

『アメリカで、昔似たような話があったって、聞いたことあるけど。本当にそうかどうかはわからないけど、森も出たことだし、早く家に帰らないと』

『アメリカ？』

エリカはきよんとしている。そんなに意外だっただろうか。私なんてアメリカなら何が起こってもおかしくない気がするが。

しばらく黙っていたスタンフォード卿が口を開いた。

『確かに、その頃急に空が光った日があったな。それで、家はどこに？この辺りでは行方知れずになった者がいるという知らせは届いていないのだが』

えーっと、英語の住所表記は逆さまに言うんだったな。

『チュウオウチョウ、エヌシ、エイチケンから来ました』

ことさらにはつきりと区切って口にした。

『聞かない……だな。リーヴ、聞き覚えは？』

『いいえ、恥ずかしながらごさいません』

胸騒ぎがする。

聞き取れなかっただろうか。それともうちの県はそんなにマイナーだったのか。紙に書いたほうが伝わりやすいかな。エリカとの森での交流で、意味を理解できないまでも文字はアルファベットとよく似ているのは確認済みだ。

「えーっと……」

私が机にペンを動かす仕草をしていると、気づいたリーヴさんが素早くテーブルの上を片付け、書き物机から筆記用具を持ってきてくれた。

羽根ペンなんて実物を見たのは初めてだ。

『ありがとうございます』

リーヴさんにお礼を言っただけでインク壺に浸したペン先を紙に下ろすが、妙に厚ぼつたい紙に引っかかってうまくすべらない。いたずらにインクのシミを作りながら文字を綴る横で、スタンフォード卿とリーヴさんが会話をしている。

『失礼ですが、この方はあまり言葉が……でない様子。ここまではっきりした……も珍しいですが、……から離れた……辺りの方ではないでしょうか』

『そうか、そこまで遠いと言葉も随分変わってくるからな。……を持ってきてくれ』

『はい』

本棚の方に向かったリーヴさんが長い筒状に丸めた紙を持って帰ってくる。テーブルの空いたスペースに広げ端を文鎮で抑えたそれは大型の地図のようだ。

確かに地図を見て指差したほうが早いと覗き込んだ私は固まった。ペン先で、念のためJAPANまで書いたNの字が滲んで原型を失くしてゆく。

『エリカ』

震える声ですがるように呼ぶと、同じく地図を覗き込んでいたエリカがこちらを見て声をあげた。
『どうしたの、ナギ』

その声が遠い場所から響いているような感覚がする。

『これは……、ここは、どこ？』

アルファベットに似た文字で街や川の情報が記された地図。街を表す点と点の間は線で繋がれている。

その道の目を辿っても、大きな街を表すだろう二重丸の点を追っても、知っている街の名前はおろか漢字を当てはめることができる地名さえ見当たらなかった。

そして何より。無数の街や道、川、山を有す、見慣れぬ形の土地のぐるりは濃淡の青で描かれた海に囲まれている。海岸線は細かく波打ち、この地図が精密なものであると無言で告げていた。

『スタンフォードはここよ』

エリカが手の先で示したのは地図の東方、密度が低い点の中の一つ。

『そうじゃなくて、この絵は？』

こんなことが

『ああ、地図を見たことがなかったのか？これが』

スタンフォード卿が得心した風続ける。

こんなことが

『このナノーグ国の姿だ』

現実にあるはずがないのに

4 (後書き)

ここにきて主人公初めて確信しました。遅すぎですね。

『ナギ、ナギ！』

私の肩をゆするエリカの声で、飛びかけていた意識を取り戻す。危ない、なんとか気を失わずにすんだ。お姫様じゃあるまいし気絶なんて一度すれば充分だ。

頭の片隅で覚悟はしていたのだ。

テーブルの向こう側にいたスタンフォード卿とリーヴさんも、心配そうにこちらを覗き込んでいる。

『顔色が悪い。熱が収まったばかりなのに無理を言ったのが悪かったな。リーヴ』

『はい』

リーヴさんは屈んでいた背を伸ばして一礼すると、静かに扉を開けて足早に部屋を出て行く。微かに何かを言いつける声が聞こえた。名前を呼ばれただけで指示がわかるなんて。まさに阿吽の呼吸というやつだ。

スタンフォード卿は地図を巻き戻し、私の手から羽根ペンを取りあげる。

ああ、まだ持ったままだったのか。

紙の上ではインクのシミが広がり、JAPANの文字が半ば消えかけていた。

『ナギ、続きはまたにしよう。……に部屋を用意させるから、今は休みなさい。』

『でも』

『焦る気持ちはわかるが、無理をしてはいけないよ』
父親の言葉にエリカも真剣に頷いている。

二人のその表情が驚くほどよく似ていた。やはりエリカは父親似だ。

『ご家族も心配しているだろうから、字がわかるなら後で……を書くといい。寝ながら……を考えておきなさい』

幼いこどもに言い聞かせるような口調。私が幾つに見えているんだろう、と少しおかしくなった。

『いえ、家族はいません』

私の言葉に、視界の端でなぜかエリカが泣きそうな顔をしている。

『そうか……。では、ここを家だと思ってゆっくり眠ると良い』

大きな手が伸びてきてそっと頭に置かれた。なんと。この年にして本日二回目だ。

感慨に浸っていると、静かな足音とやや重量感のある足音が連れ立ってきて止まり、扉が開かれる。

振り返るとリーヴさんの後ろに、たった今思い描いていたマギー

さんが立っていた。

『まだ静かにしていたほうが良いと申し上げましたのに』

非難が含まれた口調に思わず首をすくめる。

『すまない、ガードナー夫人』

驚くべきことにお叱りはスタンフォード卿に向いているようだ。

遠慮のない物言いを咎めることはせず簡潔に謝って苦笑した彼は、私と同様首をすくめて軽く両手をあげている。

『まったくですわ』

どっしりした腰に今にも両手を当てそうな様子で立っているマギーさんと、もの静かにたたずむどちらかといえば小柄なリーヴさんの遠近感がおかしく見えて、思わず目を擦った手をマギーさんに掴まれた。

『ああ、こんなに冷たい手をして。早くいらっしやい』

そのまま半ば引きずられるようにしてエリカとマギーさんについて行きかけ、扉を出る寸前で慌てて振り返る。

『スタンフォード卿、ニホン……ジャパンというところ、知っていますか』

インクが滲んだ紙をためつすがめつしていた彼はしばし考えた後、首を横に振った。

『いや。この地図には載っていないのかもしれないな。……に聞いてみよう。』

知っている人はいないだろう。そんな予感がした。

『ありがとうございます。おやすみなさい』

頭を下げた私に、スタンフォード卿は藍色の目を少し見開いた。そんなところまで本当にエリカとそっくりだ。

『……ああ、おやすみ』

その温かな笑みも。

再び目が覚めた部屋に連れて行かれるのだろうと思っていたら、渡り廊下を通った後、今度は逆に右手の通路を進み別の部屋に通された。

広さや部屋のつくりこそほぼ同じだったが、雰囲気随分と違う。

なんとというか、ファンシー？

シンプルといった言葉がぴったりだった先ほどの部屋に比べ、こてこてはしていないものの明らかに装飾に気合が入っているのが感じられる。

入り口から入ってすぐのソファやテーブルにはざっくりとしたレース編みの布がかけられ、その脇の壁には草花が描かれた額が掛

かっている。書き物机の上には可愛らしい置物や表紙の美しい本。鏡台の木枠には蔓薔薇のレリーフが施され、その前には綺麗な色の瓶が数本並ぶ。ピンクベージュのカーテンがかかった窓の向こうには、渡り廊下から見えた庭園が広がっていた。

いかにも少女が好みそうな空間だ。

私の背を押すように部屋に入ったエリカを振り返ると、期待を込めた目でこちらを見ている。

『この部屋、エリカが用意したの？』

少なくともマギーさんの趣味ではなさそうだ。

『ええ。ナギが眠っている間に急いで用意したの。気に入ってもらえるといいのだけれど』

痛んだ畳張りのアパートの部屋とは全然方向性が違うが、この手の少女趣味は嫌いじゃない。何より居心地よく過ごしてもらいたいという彼女の気持ち、部屋の随所から伝わってきてこそばゆいほどだ。

『すごく、いい。嬉しい、ありがとう』

ボキャブラリーが少ないのがもどかしいが、感謝の気持ちは通じたようだ。緊張気味だったエリカの顔が柔らかくなった。

『さあ、さあ。おしゃべりはそのくらいにして横になってくださいな』

会話が一段落したところでマギーさんが促す。その言葉にエリカも使命感を思い出したようで、表情を引き締めた。

『そうよ、ナギ。まだ調子がよくないんだもの』

二人がかりで心配され、大人しくベッドへ向かう。

小鳥のモチーフがちりばめられた衝立の向こうにあるベッドには、見る角度によって細かい模様が浮かび上がる淡い緑色のカバーがかかっており、同系色の紗の天蓋で覆われていた。これがピンク系だったらもろお姫様ベッドになるところだった。羞恥心と葛藤しながら眠る事態を避けられたことに、密かに胸を撫で下ろした。

ベッドサイドのドイリーが敷かれたテーブルには薄紅色のランプと、ここにもラベンダーが挿された花瓶。安眠できるようにとの心遣いだらう。

服を脱ぐのに少し手間取っていると、あれよあれよというまにマギーさんに脱がされてしまった。シンプルなワンピース型の寝巻きを着ながら、こつやつて意識がない間に着替えさせられたんだらうなあと遠い目をする。

カーテンを閉めて衝立をひき返し、天蓋を下ろすとマギーさんは静かに寝ているようにと言い渡して部屋から出て行った。エリカはというと、薄布を透かして、鏡台から椅子を引きずってきて枕元に据え、腰掛ける様子が窺える。

『エリカ？』

『眠るまでここにいるわ。森の中でナギがそうしてくれて、嬉しかったから』

『……ありがとう』

眠気は全くといていいほど無かったが、真剣な面持ちで座っているエリカの言葉が嬉しくて素直にお礼を言った。

目を閉じて口をつぐみ、意識して徐々に深い呼吸に持っていく。

まずここは、日本ではない。
なぜならば言葉が違う、人が違う。そして、この屋敷の住人が嘘
をついているとは思えなかった。

だったら、ここはどこ？

スタンフォード卿は地図を見てナノーグ国と言っていただろうか。
そんな国、聞いたことがない。

大陸の中の小さな国や南海の小さな島国ならば私の知らない国も
あるだろうし、日本語と現地語で呼び方が全然違う国もたくさん存
在するが、あの地図のような規模の島国を全く知らないということ
は考えがたい。それでも地理は得意だったのだ。

それとも、国というのは聞き違いで、どこかの国の一地方か？文
化的にはヨーロッパ風だけど、この屋敷内しか見ていないのではっ
きりとはわからない。

そもそも私はどうやってここに来たか。問題はそこに集約する気
がする。

人間が風で飛ばされて日本列島から外に出るなんてやつぱりあり
えない。戦時中は日本から気流に無人の風船爆弾を乗せてアメリカ
まで飛ばしたそうだが、それは気球の浮力があってこそできたこと
だ。

じゃあどうやって？

思考は堂々巡りを繰り返す。

あの日は風、雨、雷が凄かった。風力、水力、電力が……
自然災害って本当にエネルギーの氾濫だよなあ。

現実逃避しかけた頭の片隅で、何かが引つかかった。

エネルギー？

思い浮かぶのは、微妙に古い映画のワンシーン。

爆発したような髪型に瓶底眼鏡をかけた白衣の老人が円盤状の台の上に立っている。突如銃声が響き、扉をこじ開けて突入しようとする特殊部隊。そんな彼らを尻目に狂ったように高笑いをしながら、音を立てて巨大なスロットルレバーを下ろす老科学者。次の瞬間装置の上下を結んで筒状に青白い電流が行き交い……ようやく扉が開き、機関銃の弾幕が静まった後には未だ僅かに電流の名残が光る壊れた無人の装置だけが残される……

今まで観た中で五本の指に入る駄作だったが、それは置いておいて。

雷のエネルギーによる瞬間移動。これだ！

「はあ」

これまでの人生で一番長いため息をついた。思考が徹夜明け並みにぶっとんでいる。

私は完全文系人間だが、文系理系取り混ぜた百人にアリかなシか

真剣に聞いても、九割九分の人がナシというだろう。残りの一人はUFOとか呼んじゃうような人だ。おそらく。風で飛ばされた説と大差ない。

「ああ、そうだった」

意識的に考えないようにしていたが、たぶんこの世界のどこにも日本はないのだ。

なぜかはわからないが、頭の奥ではすんなりとそれで納得している自分がいた。だったら風で飛ばうが雷だろうが原因はどちらでも同じことだ。むしろ外国に飛んだというより、異世界に飛んだというほうが現実的にさえ思えた。UFOに興味はないが、それに近い属性の人格が潜んでいたのかもしれない。

「だったら」

心配する家族がいるじゃなし。迷惑をかける職場があるじゃなし。財産もこれと違ってないし、借金もない。図書館の本も返してある。

「もうそれでいいや」

だがこのままではこの人にとって、私は実在しない国に帰りたい

いと主張する厄介な居候だ。

スタンフォード卿には、記憶が曖昧で勘違いをしたと謝ろう。

そして一人で生きていけるように、この国のもろもろについて学ぼう。

私は明日から、優しい人たちをあざむいて、過去を持たないナギになる。

いつの間にか眠っていたらしい。ぼつかりと目を開けると何も見えなかった。

起き上がって枕元のランプを点けようとスイッチを探しかけ、火種がなくては点けられないことに気づき苦笑する。そういえば、懐中電灯や服などの私物はどうなったのだろう。

しばらくベッドに腰掛けてしていると次第に暗闇に目が慣れ、室内の調度品の輪郭が露になってゆく。カーテンのすき間から僅かに明りが漏れているのに気がつき、窓辺に立って音を立てないようになると、月明かりに照らされた庭園が眼下に広がっていた。背後の建物は窓に灯りもなく、半ば闇と同化している。

なんととはなしに眺めていると、窓の一つが明るく浮かびあがり小さな人影を黒く映しだした。あの位置は確か、昼間案内されたエリカの父スタンフォード卿の部屋だ。

これは好機かもしれない。

服に着替え、手に靴を持って裸足のまま部屋の外に出た。

夜も更けて廊下を通る人も絶え、話し声や水音もしなくなった邸内は静まりかえっている。それでも虫や小動物と自分以外の気配がなかった森の夜とは違い、耳を澄ませれば壁を通して人々の息遣いを感じ取れ、さながら屋敷自体が一個の有機体として呼吸しているかのようだった。

邸内の灯りは一部を除きほとんどが消えていたが、暗闇に慣れた目には月明かりだけでも充分に視界が確保できる。扉が並ぶ前を忍び足で過ぎ、格子の影が床に唐草模様を描く渡り廊下を抜けて、ス

タンフォード卿の書斎の前で立ち止まった。靴を履いた後、扉に耳をつけて中の様子を窺う。小さな物音がするのでまだ起きているようだ。

今更緊張で高まる動悸をなだめてノックしようとした時、内側から扉が細く開いた。

不意をつかれて拳を上げたまま固まる私に、部屋の奥から声がかかる。

『入りなさい』

入り口で大きく扉を開いたリーヴさんが目顔で促すままに、躊躇いがちに足を踏み入れた。書き物机に座っていたスタンフォード卿が顔をあげて立ち上がりこちらに近づいてくる。

『君か。体は大丈夫なのか？』

『おかげさまで、楽になりました』

どうして私が来るのがわかったのだろうか。

座りたまえ、とソファを勧めながら疑問を察したようにスタンフォード卿が頷く。

『リーヴが、向かいから誰かがこちらに来るのが見えたと言ったのでな』

渡り廊下の窓越しに見えたのか？振り向いた私の視線に、リーヴさんはアルカイクスマイルを浮かべて会釈した。何者だ、リーヴさん。

『夜遅くにごめんなさい』

『いや、こちらも聞きたいことがあった』

リーヴさんが書き物机の上にあったものを応接テーブルに移動させる。昼間見た地図に数冊の厚い本、それに私が書いたメモ。

『あれから君の書いた地名を調べてみたのだが、エイチケンというの……の名かな？やはりこの地図にも……にもなかった。リーヴは、君はもしかするとガーロンドから来たのではないかと言うのがどうだろう。その地方の詳しい地図を……ばわかるかもしれない。』

内側が鏡張りになったカンテラを地図にかざしたスタンフォード卿は、南西の端、海に程近い場所を指差す。

『そのことなのですが……。ごめんなさい、この紙は違うんです。隠すようにインクが滲む紙を裏返す。』

『違う？どういうことだ？』

ここが踏ん張りどころだ。嘘も方便、と良心に言い聞かせながら頭をフル回転させる。

『ガーロンド、は、ずっと前にいました。ここも、前にいた所なんです。ぼんやりしていて、間違えました。知らない間に、森にいたのは本当ですが、その前は旅をしていました』

自分で言っていて、どんなうっかりさんだよ、とつつこみをいれなくなってしまう。

『君のような女の子が一人で？なぜそんな危険なことを』

そうか、危険なのか。しまった。

『いえ、はじめは二人でした。でも途中で、彼が、私を置いて他の女の人のところに行ってしまった……！』

うつむいて拳を握り震えてみせる。実際は恋愛経験自体ないが。

『……君はいくつだ？』

顔を上げた先の相手は、あっけにとられた表情をしている。

『十九です』

正直に答えると驚きの声があがった。背後のリーヴさんも控えめながら驚いている気配がする。

『そうか、すまない。エリカより少し上だと思っていた』

そこまで若くみられたのは初めてだ。ちょっと複雑。

『気にしないでください』

だが話の真偽を疑うより、年齢に対する驚きが大きいようだ。思わぬところで童顔が役に立った。

『辛いことを聞いてしまったな。……どこまで行こうとしていたのか聞いても？』

質問が遠慮がちだ。これはいけるかもしれない。

『サザランドへ。でも、彼と一緒にじゃなきゃ、意味がありません。一緒に行こうねって言ったのに！』っそあのまま森へいればよかった』

伏し目がちのまま机上の地図を盗み見て、震える声で手前にあったんとか読める地名を挙げる。もし発音が変なら方言のせいだと思ってくれるといいのだが。

『そんなことを言わずに。つまらない男のことで自分を苦しめるのはやめなさい。君は可愛くて気立てもいいし、もっといい男があらわれるよ。なあ、リーヴ』

『はい、大変お綺麗です』

やや焦ったように機嫌をとるスタンフォード卿と、とっさに話を振られて相槌を打つリーヴさん。二人ともさっきまで私のことをこどもだと思っていたくせに、と思うとおかしくなって笑ってしまっ

た。それを見た二人がほつとした顔をする。

「なんだか自分がとんでもない悪女になったような気がして、居心地が悪い。」

「そういえば、私が持っていた荷物はどうなったんでしょっか？」

自然に聞えるようさらりと言ってみた。あの中にはまだ電池の切れていない懐中電灯が入っている。

「ああそうだった、預かっているよ。服はガードナー夫人が洗濯させると言っていた。……は壊れているのだな。少し時間はかかるが……に出せばなおるかもしれない。こちらで預かっているだろうか？その他のものは明日君の部屋まで運ばせよう。」

壊れているといったら時計か。レトロな雰囲気が入って買ったねじ巻き式のものなので、何なのかわかるなら調べられても特に問題はないだろう。

「はい、ありがとうございます。……これぐらいの大きさの、金属でできた棒はありませんでしたか？」

特に言及がないということはもしかして。

「あつたな。中にも金属の塊が入っていたが、あれはどういったものなの？」

生まれかけた淡い期待は数秒でしぼんでしまった。やっぱりね。でも分解までしておいて点灯しなかったのだろうか。

「あれは……逃げた彼に、私を捨てたことを、いつか拳で後悔させてやろうと思って。すき間に砂を入れると、もっと重くなります。」
ダンベルは無理があるにしても、あの重さと形状は充分鈍器として通用しそうだ。やけくそで答えると、スタンフォード卿は引き攣

った顔で笑ってそれ以上の追求はしてこなかった。

お茶を淹れましょう、とリーヴさんが続き部屋へ消え、沈黙が通り過ぎた。

『スタンフォード卿、これを、エリカからもらったのですが胸元でシヨールを留めていたブローチを外し差し出す。』

『見覚えがあると思った。あの子の母親が持っていたものだ』

やっぱり。

『大切なものではないかと、思ったのです。私がここを出て行った後、あなたから、返してもらえませんか』

形見のような大切なもの、私が持っていていいはずがない。

『それはできない』

思いがけずきっぱりと言いつけられた。

『母親が亡き今、エリカは仮とはいえこの家の女主人だ。自分の言動には責任を取らなくてはならないし、私もよほどのことでないかぎり彼女の意思を大切にしている』

それに、とスタンフォード卿は語調を和らげて続ける。

『世話になったからだけでなく、エリカは君のことがたいそう好きなようだ。そうは見えないかもしれないが、あの子は我慢強くて人前で強い感情を見せることはあまりないし、我侭も言わない。ナギに接する様子を見て驚いたよ。そのブローチはエリカなりの精一杯の気持ちなのだろう。大切にやってほしい』

エリカが健気で我慢強いのは知っている。持っていてほしいと言った必死な表情と、受け取ったときに見せた笑顔が脳裏に浮かんだ。

『わかりました。大切にします』

真っ直ぐな好意に、偽りでしかこたえられない自分が嫌になるけれど。

カモミールが入っているのか、林檎のような甘い香りがする熱いお茶をすすると、いつのまにか冷えていた体が温まった。淹れてくれたリーヴさんはお茶を出すと自分は飲まずに控えている。

私は勧める立場にないが、職務上飲食できないのだろうかと気にしていると、こちらを見ていたスタンフォード卿から声がかかった。

『ナギ』

なんだろう。

『家族がいなかったな。旅の目的がなくなったとも』
『……はい』

半分は嘘だけど。

『ごじいになさい』

『えっ？』

『エリカには友人が必要だし、君もエリカを好いてくれているだろう。』

でも。この場はこんな作り話で収まっても、長く滞在すれば必ず

ぼろが出てくるだろう。

『私は素性がはっきりしていませんし、まだお話していいことも、言えないこともあります』

何よりこの人たちに対して嘘をつき続けなければならないのが心苦しかった。

『言っただはずだ。覚えていないのか？』

スタンフォード卿は形の良い眉を片方器用にあげてみせた。何か言われただろうか。

『素性がどうあれ、どういう事情を抱えているにせよ、君に対する信用が揺らぐことはない』と。無理に全てを打ち明ける必要はないよ』

『……ありがとうございます』

いつそそっけないまでの簡潔さで語られる言葉に、喉が詰まり臉が熱くなる。そんな私の顔を見ずにスタンフォード卿は懐から鎖時計を取り出し、もうこんな時間かと呟いた。

『もう遅い、部屋に戻りなさい。リーヴに送らせよう』

柔らかく、しかし有無を言わせぬ口調で言われソファアールから立ち上がる。

『ありがとうございます。おやすみなさい』

言い尽くせない感謝と口に出せない謝罪を織り交せて、深く深く頭を下げ部屋から出た。

渡り廊下の格子窓から空を見上げれば、月は既に夜の端に宿り、黒から藍へのグラデーションの中に溶けゆこうとしている。

カンテラを持つリーヴさんと歩きながら、さりげなく問いかけてみた。

『前に住んでいた所では、月には兎がいると言われていました。ここではどうですか？』

それまで黙っていたリーヴさんの静かな足音が一瞬途切れ、すぐに繋がる。

『月に兎ですか。面白いですね。このあたりでは、……だとわられています』

知らない言葉だった。

『それは、何ですか？』

『ああ、ご存じないですか。体の上半分が人間の女性、下半分が魚という』

人魚か。この世界ではまさか実在する？

『もちろん、実際には存在しない、伝説上のものです』

私の疑問を読み取ったのだろうか。本当に気の回る人だ。

お聞きになりたいですか、という穏やかな声に甘えて頷いた。

『遙か昔、人々が空や海を魚や鳥のように泳げた頃。……や……を進め陸地から遠く遠く離れると、どこからともなく美しい歌声が聞こえることがあったそうです。その歌声に誘われて近づくと、次第

に……になり二度と陸へは帰れなくなるとか。危ういところで生き延びて帰ってきた者は、皆こう語りました。‘空に浮かぶ月や、穏やかな水に浮かぶ月が、あまりに美しく明るい夜に歌が聴こえたら、目を塞げ、耳を塞げ。例え命があったとしても、月面に映る美しい人魚の姿と歌声が心に焼き付いて消えず、月を見るたびに涙が止まらなくなるのだ’と』

歩くうちに向かいの棟につく。カンテラの灯りが映る窓の向こうに続く丘は、夜の海に沈んでいた。

『本当に、空の月まで行ったのですか』

空気のない世界に。

私の間にリーヴさんは、困ったように首を傾げる。

『どうでしょうね。でも、私は地面と繋がっている方が好きです』

『私もです』

顔を見合わせて、どちらからともなく微笑んだ。

この世界で根を下ろし、地に足をつけて生きていけるだろうか。

6 (後書き)

お気に入り登録者数が300を越えました。皆様ありがとうございます！それにしても、会話文が入ると文字が埋まるスピードが段違いです(笑)

早朝、カーテンから漏れる光で久しぶりに爽やかな寝覚めを迎えた。

大きく伸びをして身体中の空気を入れ換える。水差しに入っていた水を少し飲み、残りを盥に注いで顔を洗った。昨夜椅子の背に掛けておいた服に着替え、鏡台に座り、上に並んでいる瓶の蓋を端から開けて嗅いでみる。

片手で包めるほどの桃色の小さな瓶はクチナシの花のようなやや強い香り、中くらいの青みがかった瓶には、すこし鼻にツンとくるとろみのある液体が入っていた。一番大きな茶色の瓶からはほのかにハーブの香りがする。手のひらに少量を取り腕につけてみると、さらりと肌に馴染み特に刺激もないようなので、両手に伸ばして顔に塗る。

引き出しを開けるとブラシや櫛、綺麗な色の紐など雑多な小物がきちんと整頓されて入っていた。その中から目の粗い木製の櫛を選んで少しずつ梳かしてゆく。以前は顎のラインで切り揃えていた髪も肩に届くまでに伸び、毛先が不規則に跳ねていた。前髪を切り揃えるぐらいしかしたことがないので不安だが、後でハサミを借りて切らせてもらおう。

盥を持って廊下に出たところでマギーさんと鉢会った。

『おはようございます』

『おはようございます。具合はいかがですか？』

元気ですと答えると、安心した顔をして、たくましい腕で私が持っている盥を受け取る。

『これは、置いたままにして下されば私達が集めて回りますから』
いつまでかはわからないがしばらくお世話になるのだから、自分の身の回りのことで他人を煩わせたくない。

『私、こんなに大きなお家のことは全然知らないのです、どんな風に仕事をするのか、覚えたいんです』

いずれ職を探さなければならぬ。土地も持っていないし、畑仕事よりは家事のほうが向いていそうだ。

マギーさんは少し驚いた後、あっさり頷いた。

『それもいいかもしれませんが、でもどちらにせよ、旦那様にうかがってからにしましょう』

確かに居候の分際で勝手はできないので、そのほうがいいだろう。

『よろしく願います、ガードナー夫人。私からも、スタンフォード卿にお話ししてみますね』

マギーでいいですよと言う彼女に、私のこともナギと呼んでくださいとお願いして後からついていく。

階段を降り、建物の脇にある通用口から外に出た。まだ昇りきる前の柔らかい太陽の光が、草木についた水滴にはじかれてきらきらと踊っている。ちょうど昨日私が最初に目覚めた部屋から見下ろした、畑のような中庭だ。寝巻きのまま窓を開けて怒られたときに目が合ったおじさんがこちらに背を向けて立っている。

『マース！』

呼びかけに振り返った彼は、私を見て昨日と同じようにひょいっとかぶっていた帽子をあげた。

『夫のマース・ガードナーです』

マギーさんの紹介にびつくりした。引き締まった体つきをしているせいかあまり大柄に見えないのだが、二人が並ぶと背丈はマースさんの方が頭半分ほど高い。夫婦だと聞いて昨日カーテンを閉めたときの遠慮のない態度にも合点がいった。もつとも、マギーさんを見ていると誰に対してもあまり遠慮というものを感じられないのだが。

『おはようございます。ナギコ・キヨハラです。ナギと呼んでください』

『マーガレットから聞いているよ。大変な目に会ったそうだな』
『ええ、まあ……』

一瞬誰のことだろうと思ったが、マギーさんのことだと気がついた。失礼だけど随分と可愛い名前だ。

『マギーは見かけはこんなだが、優しいんだよ』

態度に出ているのかと、ぎくりとしてしまった。恐る恐るマギーさんの方を見ると、顔を真っ赤にしている。

『またあなたはそんなことを！いい加減にしてちょうだい』

眉を吊り上げている妻をよそに、マースさんは飄々とした顔で萎んだ花を摘んでいた。いつものことらしい。熟年バカップル恐るべし。

盥の水を、畝に沿って設けられている樋が繋がっている台に乗った大樽に空ける。その樽には軒先にある雨どいを受けている更に大きな樽から、木の樋が伸びていた。マースさんが小さい方の樽に付いているコックをひねると、水が少し傾いた樋を伝って畝の間を流れてゆく。樋には小さな穴が沢山開いており、そこから水がシャワーのように植物の上へと降り注いだ。

『今の季節は、あまり水を撒かんでもいいから楽なんだ』

まんべんなく濡れてゆく様子を感じて眺めていると、マースさ

んがすぐ隣に来ていた。

『花が好きなのかい？』

『はい。でも、花だけじゃなくて、草や木も好きです』

私の言葉に相好を崩すと、マースさんはコックをひねって水を止めた。

『それは嬉しい！また遊びにおいで。庭を案内しよう』

行かなくていいのかい、と指差された先に誰かに呼ばれて建物の方へ向かうマギーさんの姿を見て、私も慌てて後を追う。

『ありがとうございます！』

振り返りながら叫ぶと、マースさんは片手を挙げて見送ってくれた。

マギーさんは通用口から入ったところで、腕にシーツのような布が入った籠を抱えた女の子と話している。私に気がついた二人は会話を中断しこちらを向いた。

『ガードナー夫人、この人が？』

私と同年代ぐらいの彼女は、鼻の頭にそばかすの散った愛嬌のある顔立ちに空色の目を輝かせている。頭を覆った布からはふわふわの赤みがかった金髪がはみ出していた。

『メリー』

とがめるような声を出したマギーさんにちょっと肩をすくめてから、話しかけてくる。

『あたし、メリー・マーシャルって言います。よろしくね』

『ナギコ・キヨハラです。ナギと呼んでください。こちらこそよろしく』

お決まりになった自己紹介をすると、メリーは口を開けて笑った。『住み込みの若い女の子が他にいないから嬉しいわ。話し相手が少

なくて寂しかったの』

マギーさんが呆れたようにため息をつく。

『メリーのおしゃべりについていける人なんか、めったにいないよ。弟のしゃべる分までとりあげてるんじゃないかい？』

『コリンは静かなのが好きなのよ。あたしたち、それで釣り合いが取れてるからいいんです』

『ああ言えばこう言う。さあさ、行った行った』

マギーさんは笑いながら手を振ってメリーを追いやる。メリーはまた後でね、と言いながら通用口から出て、建物の裏手に歩いていった。

『にぎやかな子ですね』

あつげにとられて見送る私にマギーさんは苦笑する。

『弟と一緒に近くの……から出てきてね。悪い子じゃないんですよ』
気に障ったらごめんなさいと謝られて、慌てて手と首を横に振った。

ナギさん、と呼ばれて振り返ると、廊下の向こうからリーヴさんが歩いてくる。

『おはようございます。ガードナー夫人とご一緒でしたか。そろそろ朝食の準備が整いますので、参りましょう』

今七時前頃だろうか。

『おはようございます、リーヴさん』

昨夜はありがとうございました、と小声で伝えると、リーヴさんは人差し指を口唇に当て目を細めてみせた。

マギーさんと別れ、スタンフォード卿の書斎のある棟へ向かう。

どうやらこちらが母屋らしい。

リーヴさんに促されて部屋に入ると、既にカトラリーが並んだ大きなテーブルに向かってエリカと知らない女性が座っていた。

『おはようございます』

エリカがこちらを向き、顔を輝かせる。

『おはよう、ナギー！』

そのまま立ち上がって駆け寄りそうになるのを、斜向かいに背筋を伸ばして座る女性にやんわりと止められ、エリカは再び腰を落착けた。

『はじめまして』

静かに立ち上がりこちらへ近づいてくる二十代後半に見える女性は、すなりとした立ち姿が美しい。長身の彼女に濃紺のドレスと白いシヨールはよく似合っていた。

『サラ・クルーと申します。こちらでエリカ様の……として雇われております』

眼鏡ごしに茶色の瞳で微笑むと、同じ色のきつちりとまとめられた頭を絶妙な角度で下げる。つられて背筋が伸びた私も肘を曲げて腹の前で手を組み、腰から三十度のお辞儀をした。

『ナギコ・キヨハラと申します。よろしくお願ひします』

面接官の前に立っている錯覚に陥ってしまう。

『私に勉強やお行儀を教えてくださいさるの』

家庭教師か。エリカの仕草が心なしかいつもより上品だ。

室内に控えていた男性がエリカの隣の席へ促し、椅子を引いてくれる。一瞬拳動不審になりかけたが、相手を困らせるだけだと気づいてありがたく腰掛けた。いきなり椅子を引き抜かれて尻餅をつき

それで怖いと言ったら、怒られるだろうか。小学校のときそういうアホな男子がいたのだ。

クルー先生ももう一人の男性に椅子をひかれて向かいの席にいた。彼女の顔が微妙に強張っている気がする。

なぜだろうと思っていると、扉が開いてスタンフォード卿とリーヴさんが入ってきた。立ち上がるうとする私達を手で制して窓を背にした席に着く。互いに挨拶を交わす間に先程の男性二人がワゴンを押して入室してきた。一通り料理を並べると、彼らは再びワゴンを押して帰ってゆく。

『天と、地と、全ての恵みに感謝を』

スタンフォード卿の静かな声が響く。他の二人は目をつむっており、私もそれに倣う。郷に入っては郷に従えだ。心の中でいただきますと呟いていると、目を開けたエリカが囁く。

『イタダキマス、よね？』

覚えていたんだ。確かに森の中では口に出していた。うん、と頷いておく。

食事はたっぷりと量があった。籠に盛った丸いパンと金色のバター、パセリの浮いたジャガイモのポタージュスープ、人参とたまねぎ、ベーコンの炒め物。よく漬かったきゅうりのピクルスは歯ざわりが良く、スクランブルエッグを口に含めばとろりと溶ける。牛乳は今まで飲んだことがないほど濃厚で、思わずおかわりを貰ってしまった。

リーヴさんが淹れてくれた食後のお茶を飲んでいると、スタンフォード卿がクルー先生に話しかけた。

『クルー先生、お願いがあるのですが』

『なんでしょうか』

クルー先生はティーカップを受け皿に戻し、姿勢を正す。

『エリカと一緒に、ナギにも色々と教えてもらいたいです。ここから遠く離れた所から来たので、習慣や言葉に大分違いがあるようなのだが、すぐに呑み込むでしょう』

お茶が気管に入つてむせそうになるのをなんとかこらえた。いやいや、一からならともかく、エリカと一緒ににはどう考えても無理だろう。

『かしこまりました』

えっ、あっさり引き受けちゃうの？

『確かに違いはあるようですが、基礎ができていらっしやるので大丈夫かと存じます。足りない点は個別に補うとして、ご一緒に勉強することでエリカ様の励みにもなるでしょう』

助けを求めて隣のエリカを見ると、嬉しそうに頷いていた。

『あの……』

遠慮がちに声をかけると、皆がこちらを見る。

『お気持ち、とても、ありがたいです。でも、お世話になりますし、これからの役に立つかと思つて、マギ……ガードナー夫人に、仕事を習おうかと、考えているんです』

エリカと同じことを学ぶより、そちらの方が実践的な気がする。

『ナギ、行儀作法や読み書きは習つておいて損はないぞ。せつかく少し字が書けるのだから、すぐ上達する。確かに家事を覚えることも役立つだろうがな』

ちよつと難しい顔をしたスタンフォード卿は、ぼんと手を叩いた。『では、ごうしょう。昼まではガードナー夫人について家事を習う。』

昼からはエリカと一緒に読み書きの勉強をする。行儀作法は食事やお茶の時間に学べば良い。合間は人と話したり、自由に過ごしたまえ』

どうやら決定事項のようだ。

でも、よく考えるとこれは願ってもない話だ。衣食住に加え職業訓練と教師までつけてもらえる環境なんて、この機会を逃せばもう巡ってこないだろう。

『ありがとうございます。よろしく願いします！』

その場に居た全員に勢い良く頭を下げる。

直後、髪が乱れない程度に、とさつそくご指導を賜ってしまった。

8 (前書き)

あまり汚い表現ではありませんが、トイレの話題がでます。

朝食後マギーさんをつかまえて、スタンフォード卿の許しを得たことを告げる。

『わかりました。でも、旦那様がおっしゃるようにお作法や読み書きの勉強も大切ですからね』

既に話を通していたようで、濃い色のワンピースと白いエプロン、頭を覆う布を手渡された。

『他の者には行儀見習いのお嬢さんを預かっていると伝えておくようメリーに言いましたから、今頃屋敷中に知れ渡っているでしょう』

余計な尾ひれがついていないといいのだが。

部屋に戻って着替えてから階下に降りると、階段の下で小さな木のバケツと素焼きの壺を持ったマギーさんが振り向いた。

『もう会った者もいますが、屋敷を案内がてら働いている者を紹介しましょう』

『お願いします』
しつかり顔と名前を一致させなければ。

『もう食事の片づけが落ち着いた頃でしょうから、まずは……へ』
歩きだしたマギーさんのバケツに慌てて手を伸ばす。

『片方持たせてください』

中には茎が水に浸かっていたいい匂いのする草が数種類入っていた。

『ありがとうございます。それは料理用の香草ですよ。マースから預かってきました』

スペアミントにローズマリー、オレガノ。柑橘系の香りが混じるのはタイムだろうか。ここで出される食事はハーブが巧みに使われていて、素朴ながらも美味しい。

一旦外に出て母屋に向かい、食堂や書斎があるのとは反対側の裏手に回る。軒先にはコックのついた天水桶が設けてあり、そこから伸びた木の管は格子窓の隙間から壁の中に吸い込まれていた。

小さな扉から中に入ると、そこは厨房になっているらしく、棚には鍋や木の鉢が並び、漆喰で白く塗られた壁にはフライパンが掛かっている。

『アリアン、今いいかい？』

マギーさんが声をかけると、エプロンで両手を拭きながら奥から女の人が出てきた。ふっくらとした頬と小さい鼻を持つ顔立ちは優しげで、肌の色は少し浅黒い。

『マギー、その方がナギさんね？』

目尻を下げると細い目が糸のようになる。

『ガードナー夫人からお話は聞いています。料理長のアリアン・キーツよ。今朝の食事はどうでしたか？』

『とても、美味しかったです。特に、ジャガイモのスープが、最高でした』

滑らかでさらりとした舌触りが朝食にぴったりで、少し変わった風味がした。

『嬉しいわ。この香草を入れたんですよ』

ありがとう、と私が持っているバケツを受け取った彼女は、その中の一つを指先でちよんとつつく。嗅いでみるとぴりりとした香りがした。

『お待たせ。今月分の……を持ってきたよ』

マギーさんが素焼きの壺を手渡すと、戸棚から別の壺を取り出したアリアンさんは持つてきた壺の中身をそこに移した。うっすら茶色がかった細かい粒がさらさらと流れ落ちてゆく。

『前のがまだ少し残っているから、今日は……を焼きましよう』

その言葉を聞いて、マギーさんは嬉しそうな顔をした。

『キーツ夫人の作ったお菓子は絶品なんですよ。ナギさんもお茶の時間を楽しみにしてくださいね』

それは楽しみだ。どうやら壺の中身は砂糖だったらしい。どんなお菓子を作るんだろう。

『もしよかったら、手伝わせてもらえませんか？』

恐る恐る聞いてみる。専門職みたいだし、軽々しく職分を侵すのは気がひけた。

『いいですよ』

アリアンさんはあっさり頷く。

『昼食の仕込を終えてから始めますから、またその頃に来てくださ
い』

『キーツ夫人、野菜が届きました』

扉が開いて小柄な女の子が入ってくる。両腕に抱えた大きな籠には瑞々しい青菜や縞模様のナス、大きなズッキーニなどが山盛りになっっていた。

彼女は厨房の隅にあるテーブルに籠を下ろすと、リスを思わせるくりくりしたはしっこそうな茶色の目でこちらを見る。

『さつきメリーに会って聞いたわ。あなたナギさんでしょう？あ
たし、アン・スミスです』

すごい、本当に知れ渡っている。

『アン。遅いと思ったわ。立ち話もほどほどにしなさい』

軽く睨みつけてみせるアリアンさんに謝ったアンは、肘まで捲り上げていた袖を下ろした。

『メリーが放してくれないんですもの。それよりキーツ夫人、聞いてください！』

なにやら憤慨している様子だ。

『昨日……も持ってきてって頼んだのに、ケインったら、すっかり忘れてたって言うんですよ！』

『まあ、どうしましょう。夕食に使うつもりだったのに』

別のものを考えるしかないわね、と言うアリアンさんに、アンは胸を張る。

『大丈夫です！昼からトムさんが……を持ってくるので、一緒に運んでもらうよう頼むように言っときました。もちろんお礼はケイン持ちで。遅れるんだから、って多めにおまけすることも承知させましたから』

うわあ、たくましい。

あとの二人も、感心半分呆れ半分というふうに聞いている。

『その……が料理に向いたらいいのにねえ。今朝の食事はなんだい、私は卵の殻が歯に挟まったよ』

マギーさんが顔をしかめる。アリアンさんを見ると、練習でアンに使用人の食事を作らせているのだ、と小声で教えてくれた。

『すみません』

アンは可哀想になるぐらいわかりやすく落ち込んだ。

『それでも、前よりはましになったわよ』

アリアンさんが慰めるようにのほほんと言う。

『壺に入っている砂糖を全部入れたり、たまねぎを皮ごと茹でたり、

右手に持っている刃物で右手を切ったりしていたものね』

『そんなことをしていたのかい』

フオローになっていない。アンは更に縮こまってしまった。

アリアンさんが床に置いた手桶を指差す。

『アン、今朝はあれだけよ』

『わかりました』

覗き込むと、二つの手桶には野菜クズや卵の殻などの生ゴミが入っていた。どこに捨てに行くのだろう。

『マギーさん、アンについて行っていいですか？』

了承を得てから手桶を一つ持ち、連れ立って勝手口を出て母屋の裏手を壁沿いに進む。しばらくして立ち止まり外壁に取り付けられた梯子段を登ったアンは、人間の背ほどの高さに設けられた蓋を開けて手桶の中身を素早く放り込んだ。

『その穴は何？』

私の質問に、降りてきたアンは簡潔に答える。

『お手洗い』

え、トイレ!？

怖いもの見たさで梯子段を登り、息を詰めながら蓋を開けて穴を覗き込む。内部は暗くてよく見えないが、覚悟していた腐敗臭はしなかった。むしろ森の腐葉土に杉や檜のような木の香りが混じったようないい匂いがする。

そういえば、共同のトイレは水洗ではなかったが嫌な臭気はなかった。田舎の汲み取り式をよく知っているので、逆に違和感を覚えたものだ。

『あんまり頭をつつこむと、上のお手洗いから降ってくるわよ』

慌てて頭を穴から引き抜いた。

『冗談よ。そんな位置に穴を開けないわ』

アンはけらけらと笑う。それもそうだ。

『でも、どうなってるの？こんなところに、捨てて大丈夫？』

疑問に思っていると、あれを見て、とアンが上を指差した。

視線の先、赤茶色の屋根の上で何かが回転している。今まで気がつかなかったそれは、よく見ると風車だった。離れの屋根の上にも同じものがあるようだ。

『ここは丘の上だから風がよく吹くの。粉を挽くみたいに、あれが回るとこの穴の中がかきまぜられるみたいね』

脇にあった物置からずだ袋を取り出し、アンは再び段梯子を登る。ざざつと穴に開けた中身は、どうやら木屑のようだ。

『部屋に置いてあるお手洗いの中身も集めてここに捨てるの。しばらく経つと良い……になるらしいのよ。野菜がよく育つんですって』
使っていないが、確かに私の部屋にも引き出し式の簡易トイレがあった。

『へえ、すごいね』

コンポストか。人糞を肥料にする国はあまりないと以前読んだことがあるけど。

『……にも同じものがあるわよ。あたしのいた村にも一つあったけど、ここまで立派じゃなかったわね。家では使ったびに手で回していたわ』

アンは手でハンドルを回す仕草をする。この設備自体は珍しいものではないようだ。

割と清潔な世界で良かった。私は潔癖症と言うわけではないが、もしヴェルサイユのように庭に垂れ流し状態だったら我慢できなかったかもしれない。

『使い終わったものを、この新しい木屑と交換に持っていく人もいるのよ』

ちりがみ交換みたい。確か昔の日本でも屎尿は売買されたんだっ
たな。

『私の住んでいた所でも、ずっと前は、お金で売っていたみたい』

『お金になるの!?!』

しまった、食いついてきた。

『いや、でも、そうしたら、これも買わないとだめなんじゃない?』
木屑の入った袋を指差すと、アンはがっかりしたようだった。

『そうよね。今ならタダなんだし』

さっきといい今といい、本当にたくましい子だ。

『これは、どうするの?』

まだ手桶一つ分の生ゴミが残っている。

『ああ、それはね。……に持って行くのよ。……が食べるの』

アンは空の手桶を持って歩き始めた。

今度は離れの裏手に回って干されたシートがはためくロープの間を抜け、踏み固められた小道を進む。ほどなく柵で囲まれた広い草地が姿を現した。草地の横には長屋のような背の低い建物があり、茶色や黒の大きな動物が数頭草を食んでいるのが見える。

馬だ。

近づくとつれてその姿は大きくなり、柵のすぐ側までたどり着くと、ちょうどそこにいた馬の背中では私の肩ほどもあった。

「うわあ、大きい」

思わず大きな声を出すと、馬は耳をピクリとさせた後立て、落ちて着きなく足踏みする。どうやら警戒しているようだ。

建物から少年が出てくるのを目にしたアンが声をかけた。

『コリン！』

私以上の大声に、馬は耳を後ろに伏せ、歯をむき出しかける。少年は急いでこちらへやってきて馬の胸に手を当て、低い声で囁きながら鼻筋を優しく撫でた。しばらくそうしていると馬は鼻息を鎮め、少年の頭に首を擦りつける。

『アン、馬がびっくりする』

呟くように言った少年は馬から目を放し、初めて気がついたというように私を見た。私よりも頭半分背が低い。

『ごめんごめん。紹介するわ、ナギ。メリーの弟のコリンよ』

ナギのことはメリーから聞いてるでしょ、と言つアンに、コリンはこくりと頷いた。メリーと同じく赤みがかった金髪に空色の目をした彼は、まつげの長い繊細な顔立ちをしている。

不意に鐘の音が響いた。風に乗って遠く近く流れるそれを聞いて、アンの顔色が変わる。

『大変！もうこんな時間。昼食の仕込みを手伝わないと叱られちゃうわ』

アンは柵越しのコリンに中身の入った手桶を押し付けると、踵を返してもと来た小道を駆けあがる。

『コリン、ナギに……を見せてあげてー!』

途中振り返って叫ぶと、一目散に走ってゆく。その姿は、あっと
いう間に生垣の向こうへ消えていった。

8 (後書き)

ご指摘、感想を下さった方、ありがとうございます。以前下さった方にも併せて御礼申し上げます。

残されたコリンと私は顔を見合わせた。これまでは誰かがしゃべっているのを聞いていればよかったが、突然口数の少ない人と二人きりにされると困ってしまう。

『えーっと。メリーから、私のこと、聞いたって？』

『うん』

しばしの沈黙の後問いかけた私に頷いたコリンは、ちよつと笑うふうにした。

『なんて、言ってた？』

『あなたは森で修行してて、迷っていたエリカ様を助けたって。勘違いして襲い掛かったイーヴァさんやラマンさんを、逆にやつちやったって本当？』

『やっぱり盛大に尾ひれがついていた。修行って何？』

『あのね、コリン』

どこから間違いを訂正しようか迷っていると、コリンが今度ははつきりとくすくす笑う。動きに合わせて、緩く巻いた金の額髪が揺れた。

『わかってるよ、嘘なんですよ。メリーはいつもそうなんだ』

わかつていたんだ、と胸を撫で下ろす。でも、他の人にもそんな調子で言って回ったんだろうか。

『安心して。他の人にはこんなこと言っていないと思うよ』

たぶんね、とコリンは大人びた口調で呟く。

『許してあげて。僕を笑わせようとして変なことばかり言うんだ』

悪気はないんだよ、と心配そうに言う彼に笑顔で頷く。確かにこの子の笑った顔を見るためなら、作り話の一つや二つしたくなる気持ちはわかる。

『これは、馬が食べるの？』

コリンが持つている手桶を指差す。

『そうだよ』

こつちに来て、と言う彼の手を借りて柵を乗り越え、建物へと向かった。屋根には屋敷のものと同じ風車がついているので、ここにも尿尿を処理する設備がついているのだろう。

薄暗い中に入ると、厩舎らしきそこは動物特有の匂いはするものの清潔に保たれているようで、個別に仕切られた馬の寝床には新しい干草が敷き詰めてあった。今は大半の馬が草地に出ており、厩舎は閑散としている。

コリンは仕切りの前に並べられた細長い箱に、持ってきた手桶の中身を確認しながら入れてゆく。林檎の芯や人参のヘタ、青菜の根元など野菜クズばかりで、卵の殻や骨などは入っていないかった。

次いで彼は厩舎の隅から大きな籠とナイフを持ち出し、中身を切り分けながら同様に箱に入れる。覗き込むと、キャベツの外側の硬い部分やひろひろした親指ほどの太さの根菜、人参の葉っぱなどだった。確かに人間はあまり食べない部位だ。

『近所の農家の人、肥料と交換に持ってきてくれるんだよ』

『へえ……』

見ているだけなのも手持ち無沙汰なので、私も手伝うことにした。

『コリンも、ここに住み込み？』

しゃがみこんで、ややしなびたキャベツをちぎりながら尋ねる。

『うん。三年前に親が死んで、お屋敷に引き取ってもらった』

さらりと答えたコリンの言葉に悲壮感はなかった。ひとまずは自分の中で折り合いがついているのだろう。

『そう。私も、家族がいないって言ったら、ここにいろって言われ

た

私の言葉にコリンは一瞬手を止めてこちらを見る。

『そうなんだ。スタンフォードはいい所だよ。お屋敷の皆もいい人達だし、きつとナギも気に入る』

ぼつぽつとした話しぶりながら、なんだか慰められる気がした。

『コリンみたいな弟がいたら、いいだろうなあ』

ぼそつと呟くと、彼は耳を赤くして反論するよつに言う。

『そんなに年が違わないだろう？』

この子もか。メリーに年齢も一緒に伝えて回ってもらえばよかった。

『あー。コリンは、幾つ？』

十四、と答えが返ってくる。

『ごめん、私、十九です』

反応は予想通りのものだった。そんなに童顔ですか？

メリーよりも年上だなんて、と呟くコリンをなぜか慰めながら厩舎の外に出る。ちなみにメリーは十七だそうだ。彼女のほうが確実に女性らしい体型をしていたのを思い出して、もの悲しくなった。もしや童顔というだけではなく、この体型も幼く見られる一因なのだろうか。

べたっ

軽く落ち込む私の頬に、生暖かいものが触れた。

「うわっ！」

飛び上がって振り向くと、馬の鼻面が間近に迫っている。大きな黒い目は私の目線とほぼ同じ高さできらきらと輝いており、好奇心をあらわにしてこちらを見つめていた。ふいごのような鼻の穴から息が吹きだされるたびに、私の伸びた前髪が宙を舞う。

『こら、ポール』

コリンは優しく馬の首筋を叩き、たてがみに手を差し込んで搔いてやった。コリンの肩口に顎を擦りつける馬は、どう見ても彼に甘えている。もし猫だったらごろごろと喉を鳴らしていることだろう。

『コリンは、馬が好きなんだね』

言葉よりも雄弁に、彼の手や馬に注ぐ眼差しがそのことを物語っていた。

『ポールは特別なんだ。生まれたときから僕が育ててきたから』

そう言うなり、コリンはたてがみを？んで、ひらりと鞍も手綱もつけていない若馬の背にまたがった。

柵の側に寄っていて、と私に言い置くと、かかとで馬の腹を軽く蹴る。はじめはゆっくりと、徐々に速度を増す彼らの残像は、人馬一体となって馬場を駆け巡る。陽光に少年の金髪と、筋肉が躍動する艶のある馬の肌が明るく照り映えた。

馬を歩かせながら戻ってきたコリンは、私の側まで来て地面へ飛び降りる。

「すごい……」

馬がこんなに綺麗な生き物だとは、思ってもみなかった。

『乗ってみる？』

頬を紅潮させて額に軽く滲んだ汗を拭うコリンを見て、目を細める。可憐すぎて眩しい。

『乗ったことないから。そのうち、教えてくれる？』

『いいよ』

またね、とコリンに手を振って陽のあたる緩い坂道を引き返す。空になった手桶は軽い。振り回しながら歩いていると自然と鼻唄が漏れた。

坂を上りきり、白いクレマチスが絡みついたアーチを抜けたとき、少し離れた植え込みの影から視線を感じた。なんとなく穏やかさに欠けるそれが気になって、さりげなく立ち止まる。

視線に対して斜めにしゃがみこんでこちらを隔てるように手桶を置き、木戸の脇に咲いていた瑠璃色の矢車菊^{ヤグルマギク}を摘む。それを手桶に入れる際、取っ手越しに僅かに視線をずらして、伏目がちにあちらの様子を窺った。

一輪目。髪の色は帽子を被っていて定かではない。

二輪目。瞳の色は黒いような。

三輪目。さすがに怪しまれるだろうか……

男女を識別しようと盗み見たとき。

『なんだ、ネルロじゃないか』

唐突に第三者の声が響いた。しゃがみこんでいた私は一瞬びくくつとして立ち上がる。視線の主が潜む植え込みの向こうから、鍬を担ぎながら近づいて来たのは、庭師のマースさんだ。私は同じく立ち上がった視線の主に対して、努めてきよとんとした顔を作り向けてから、いかにもマースさんに意識が向いていた風に装う。

『マースさん。ごめんなさい。勝手に花を摘んでしまいました』

顔が引きつっていても、この台詞なら不自然ではないはずだ。

『ああ、それは種が運ばれて勝手に増えたものだからな。かまわな
いよ』

『よかった。ありがとうございます』

言いながら、猛烈に罪悪感を感じた。

おまえのせいだ！と八つ当たりしたい気持ちを抑えて、ストーカーの方に向き直る。どこかで見たことがあるような？

「あつ」

ひゅう、と喉が鳴った。

女のように白い肌と薄い唇にその横のホクロ。森の中でこちらを狙っていた射手に間違いない。

近づいてきた射手は、唇の両端を三日月のように吊り上げると帽子を取った。

『怖がらせてしまうかと思って、声をかけられませんでした。かえって驚かせてしまいましたね』

申し訳ない、と言ってその場に跪くと、固まったままの私の手を取る。細めてはいるが決して笑っていない目は、蛇を髣髴とさせた。『ネル口・カリオテイと申します。先日はエリカ様のお命を救っていただいたのにも関わらず、恩に背くがごとき行いをしまして申し訳もございません。このような可憐なご婦人になんたる振る舞いをお見せ！ああ、美しい方。愚かな私をどうかお許しください』

『わかりましたから、放してください』

微妙な言い回しはわからなくても、齒の浮くような事を言われているのは嫌でもわかった。捕らえられた手をさりげなく放そうとしても、絶妙な力加減で押さえられて引き抜けない。そのうえ指先に口付けかれて、全身の血がざっとひいた。服の下で肌が粟立ったのがわかる。

たまらず指先を反らして耳に向けて持ち上げ、腕を大きく回して拘束を外す。都会は怖いところだと散々聞かされ、真剣に読んだ『これでバッチリ 護身術』の最初のページに出でいたうる覚えの技。実際役立ったのはこれが初めてだ。

『すみません、このような習慣に慣れていなくて』

鳥肌をさすりたいのを堪えながら目を伏せ、込み上げる怒りのエネルギーを震える声と赤面に換えて恥らってみせる。こいつに對して罪悪感を覚える必要はない。離れたところで弓を構えていただけ

だし。

蛇男は尚も何事か言い募ろうとしたが、マースさんに睨みつけられた。

『ネル口。お前さん達が旦那様の仲立ちなしにナギさんに近づくとは、まだ許されていないはずだぞ』

『慙愧の念に耐え切れず、つい』

失礼しました、と踵を返して去ってゆく彼の姿から背を向けざま、背後から先程と同じく悪意に満ちた視線を感じた。

通常ならば自意識過剰だと一蹴するところだが、先程のストーカー行為に加え、力を込めて捕らえられた指先の痺れに本能が危険信号を発している。そしてここしばらくその本能だけを味方にして生きてきた私には、ネル口を警戒する以外の選択肢はなかった。

『大丈夫かね』

側まで来たマースさんは心配そうに私の顔を覗きこむ。

『はい。ちよつと、驚いてしまつて』

『あいつは今ひとつ得体が知れない』

マースさんは苦々しげにため息をついた。

『おつと、余計なことを言つたな』

気にしないでくれよ、と笑つて側のアーチからクレマチスを一輪ばちんと切り取ると、私の耳の横に挿してくれる。

『その矢車菊セントウレーアもいいが、白いクレマチスもよく似合う』

この素朴な賞賛は、恥ずかしくも受けとめることができた。

『ありがとうございます。これから、アリアンさんのお菓子作りを手伝わせてもらえるんです。後で持って来ますね』

『楽しみにしておるよ』

マースさんは嬉しそうに目を細めた。

アリアンさんご自慢のお菓子は、スパイスの効いたジンジャーケーキだった。

彼女が体重をかけて、取っ手のついた大きな麵棒でテーブル一面に広げた茶色い生地を、私とアンは打粉をつけた型を両手に持ってぼんぼんと抜いていく。

まるで、子供の頃憧れた『長靴下のピッピ』のワンシーンのようだ。もつとも、彼女は大胆にも生地を家の床に直接広げていて、子供心にそこはいただけじゃない、とも思ったが。

思い出してくすつと笑った私を見て、アンが不思議そうに鼻を手の甲でこする。その拍子に鼻の頭に白く粉がついて、ますます笑いを誘われた。

三人でそれぞれ生地の端を持ってそうつとはがすと、テーブルに花形に抜き取られた生地がびっしりと残った。アンと二人してせつせと天板に並べる横で、アリアンさんは再び残りの生地をまとめて伸ばしにかかっている。

熱されたレンガ造りのオーブンに生地を載せた最後の天板を収め、使った器具を片付ける。

テーブルを拭き清めたところで、タイミングを計ったかのように勝手口が開いて、マギーさんが現れた。

『ナギさん。あなたの荷物をお部屋に運んだので、見にいらしてくださいな』

そういえば、昨夜スタンフォード卿がそんなことを言っていたわけ。

既に昼食の仕上げに取りかかろうとしている厨房の二人に別れを告げる。かまどの前から振り向いて、お茶の時間を楽しみにしてい

て、と言つアんに軽く手を振つて、勝手口から出て離れへと向かつた。

9 (後書き)

拙作を読んでくださる人の中にも被災された方がいらっしやるのでは
はと思い、意味がない事と知りながらアップを躊躇っていました。
ライフライン復旧後に、それらの方全員にまた読んでいただけます
ように。

募金ぐらいしかできないことが歯痒いですが、西日本の片隅から皆
様の無事を切にお祈り申し上げます。

与えられた自室に近づくと、扉の前でリーヴさんが影のように佇んでいた。とうにこちらに気がついていた彼は、真っ直ぐに伸ばした体軀を折って、綺麗に撫でつけた白髪はくはうの頭を下げる。

『ナギさん、少々お時間をいただいても？』

穏やかな表情を湛えてはいるものの、上げた視線には、剣呑とはいかないまでもほのかに含むものが感じられた。

『ええ、もちろんです』

ノブに手を掛けようとすると、すっと前に出たリーヴさんが扉を開け、自然な動作で室内へと促す。

ううむ、プロだ。

応接テーブルの上には風呂敷のような布が広げられ、その上に私の所持品が整然と並べられていた。

きちんと置まれたぼろぼろのリクルートスーツ、無骨な木の椀、ゴミにしか見えないカップ。木の実や棒などのこまごまとした品までとっておいてくれたようだ。

自分で編んだ歪いびつな籠の縁を指でなぞりながら、サバイバル生活に思いを馳せる。

森にいたのはほんの数日前の事だというのに、不思議なほど現実感がなかった。況や日本いわんでの生活となっては、まるで白昼夢の中で別世界を垣間見ていたような心地さえする。

いや、実際異世界なんだっ たっけ。

不自然な品は早々に処分しなければ。小さな籠は何かに使えそうだから、部屋の隅に置いておこうか。

脳内で個々の処遇を振り分けるうち、見覚えのない布包みが目に留まった。

『これは……？』

手を伸ばしたのをリーヴさんに制される。慎重に包みを開く彼の手元を覗きこむと、鈍く光るナイフが現れた。

ドクン、と心臓が音をたて、指先が冷たくなる。

刃についた血は既に拭い去られているにも関わらず、脳裏に焼きついた光景がまざまざと思い返されて、思わず手の平を凝視する。背後から強い腕に支えられて漸く、自分がふらついていたことに気づいた。

導かれるままにソファに腰を下ろして自嘲する。

なんの覚悟も持たずに凶器を人に向けるとは、なんて愚かな。

先程厩舎からの帰りに出会ったネル口の眼差しを思わせる、ぬめりを帯びた刃の輝きを見つめていると、不意にリーヴさんが尋ねてきた理由が知れた。

『エリカを、攫った人、のことですね？』

頷いたリーヴさんの気遣わしげな視線を受け、ひらひらと手を振る。

自失している場合ではない。もし黒幕がいるとすれば、つきとめられなかったせいで、エリカがまた攫われたりしたら大変だ。

『……ありがとうございます。どのような事でも構わないので、お聞かせ願えますでしょうか？』

エリカが言うこととあまり変わらないと思うが、と前置きして、
つかえながら知っている限りのことを証言した。

事実として知っていることは多くないが、リーヴさんが刑事ドラマの補佐役並みに辛抱強く巧みに話をひきだしてくれるので、私も断りを加えた上で推測を交えて話す。

エリカに見せなかつた誘拐犯の遺骸にまつわることについても、
捜索に来た人々は当然見たのであろう、私の話を補足されながら幾つか質問を受けた。

ひとしきり話し終え、荷物の中から誘拐犯の男の所持品をまとめ
て籠に入れ差し出す。

『何か、お役に立てることが、あればいいのですが』

一応犯人の屍骸の第一発見者であるにもかかわらず、現場を荒ら
しまくってしまったので責任を感じる。

軽く目を見張ったリーヴさんは、ゆるゆると首を横に振った。

『いいえ、大変重要なお話を伺いました。旦那様も喜ばれるでしょ
う』

偽りのないねぎらいの言葉に少し気が軽くなった。

『あの、ネルロさんという人なんですけど……』

おずおずと発した私の言葉に、ナイフを布で包みなおしていたリ
ーヴさんが振り向いた。

『お会いになつたのですか』

思いがけず真剣な口調にたじろぐ。どうにも拭えない不安を消し
たくて聞こうと思ったのだが、まずいことを言っただろうか。

『はい、先程、庭で』

『……彼について、どうお感じですか？』

お世話になっている人の部下を悪し様に言うのは気がひける。無
難な言葉を探していると、率直におっしゃってください、と畳みか

けられた。

仕方ない、腹を括くろう。

『私の、気のせいだと、思うのですけれど』

聞き終わったりリーヴさんは難しい顔をした。

『ナギさんにも事情を知っていたただいた方がよろしいでしょうな。』

旦那様にお話ししますので、念のためネル口には近づかないようにしていただけますか』

深刻な雰囲気ふんいきに、ごくりと唾つばを飲み込む。

『何か、あるのですね』

無言の頷うなずきが答えだった。

恐るべし本能。

昼食の席にスタンフォード卿が着くことはなく、リーヴさんの姿も見当たらなかった。

食卓に並ぶカトラリーは朝食と同様必要最小限で、やたらとナイフやフォークをとつかえひっかえすることはない。それでも、他人に給仕をされクルー先生を意識して行儀作法を気かけながらの食事は、軽い緊張感を伴った。

もぐ、と皮が香ばしいローズマリー風味のオープンポテトを咀嚼しながら、清潔で明るい卓上を見渡す。

というか作法うんぬんより、ここ暫く下手をすれば草の上に胡坐をかいて手づかみで食べるといふ、シンプルかつワイルドな食事風景だったので、その落差の激しさが腰が落ち着かない要因の大部分を占めているのだ。

そうは言っても、もちろん堅めに焼いたパンに、お酢とハーブを効かせた瑞々しい野菜のサラダや、具沢山のトマトスープといったやや軽めの食事は、他の人に倣ってパンでお皿を拭い最後の一口まで美味しくいただいたけれども。

食後溜まった手紙の返信を書くというエリカは、心なしか足取りが重い。思わず出てしまったと言いたげに、可愛い顔に似合わないため息さえ吐いている。

令嬢にもいろいろと面倒なことがあるのだらう。

『お茶の時間に、たぶん、アリアンさんのジンジャークッキーが出るよ』

甘いものが好きみたいだし、元気を出して欲しくて胸の前でぐつと拳を握りながら声をかける。

『本当？じゃあ、がんばるわ！』

思いの他励みになったらしく、エリカは真似をして小さく拳を握り、行進するように足を踏み出しながら自室へと引きあげて行った。

『失礼ナギさん、よろしいですか？』

クルー先生と二人で微笑ましくその後姿を見送っていると背後から声がかかり、隣に立つ先生の肩がぴくつと動く。振り返ると、食事中リーヴさんに代わって給仕を努めていたトリスさんが立っていた。

『なんででしょうか』

振り仰ぐようにして見ると、長身を屈めてくれる。窓からの光を反射する眼鏡に遮られて定かではないが、視線は合っているようだ。『御用がないなら、書齋に来てくださるようにと、旦那様から伺っております』

『わかりました。ありがとうございます』

クルー先生に向き直り会釈をして書齋に向かおうとすると、一瞬彼女の口が何か言いたげに開いて閉じた。私が首を傾げると、何でもないといった風に再び口の端が上がり、ゆるゆると首が振られる。

私が踵を返した後ろでなにやら火花が散った気配がしたが、関わるべきではないと勘が告げたので、足を止めずにその場を後にした。くわばらくわばら、君子危うきに近寄らず。これ以上厄介事に頭を突っ込んでたまるもんか。

この屋敷に来て三度目になる重厚な扉の前に立ち、昼間のこと、

今度は金具を打って訪いを告げる。

ほどなく応えと共に扉が内に開いて、リーヴさんの微笑付きで室内へと招き入れられた。

『よく来てくれた』

ローテールの脇に立っていたスタンフォード卿は、片腕を広げて私を鷹揚にソファーへと促す。向かいに腰を下ろした伶俐な顔には、あるかなしか苦いものが混じっていた。

私の顔を見て眼光を緩め微笑した彼は、ふつと息を吐いて掌で自らの眉間を撫でた。

『エリカが戻ってきて気が緩んだのでな。その間棚に上げておいた仕事に追われているのだ。もっともそれはエリカも同様だろうが』
年のせいかな、と溜息をつく顔は、いつものように凧いでいる。

『エリカは手紙の返事、書くのが、大変そうでしたよ』

強張りかけた表情筋をほぐしながら答えた。

『スタンフォード卿も、お疲れでしょう。……別の問題もあるようですし』

早く本題に入ってください、という思いを込めてにっこりと目の前の顔を見据える。

沈黙したスタンフォード卿の表情は変わっていないが、肩が細かく震えている。

やばい、生意気過ぎたかな。誰譲りかは知らないが、無鉄砲で子供の頃から結構損をしている。

でも、回りくどいことは根本的に性に合わないのだ。それに、私ごとき小娘が腹芸で相手になるような人ではないのは、この屋敷での短い滞在で既にわかっているつもりだった。

『あの……』

おずおずと声を掛けたとき、対面から小さく破裂音がした。

慌てて覗き込むと、スタンフォード卿が口元に手を当てて笑っている。

『つつ、くく、いやすまない。はぐらかすつもりではないのだよ。

リーヴ、君が正しかったな』

『恐れ入ります』

疲れのせいか、リーヴさんの冷静な返答が更にツボにはまったらしい。スタンフォード卿は暫く声を殺して笑っていたが、やがて目の端をリーヴさんが差し出した手巾で拭い、真顔に戻った。

『この話は、家中でもごく限られた者しか知らない。』

それを心得てくれ、とスタンフォード卿は言外に告げる。

私は神妙に頷いた。

『エリカが攫われた時、何かを要求する文はどこからもなかった。

それで捜索に手間取ったのだ。』

思い出したのか、卿は藍色の目に苦々しい表情を浮かべながら続ける。

『下手人は、村はずれに住んでいた男だということだ。』

卓上に広げた地図、当地スタンフォードだと教えられた地点に銅色あかがねいろの硬貨がパチンと置かれる。

『領民の話によると、事件の前の数日、男はいつになく羽振りのよい様子で、酒場で派手に遊んでいたらしい。そうだな、リーヴ』

視線を受けてリーヴさんがすつと前へ出る。

『はい。あまりにも金遣いが荒いので不審に思った酒場の主人が尋ねたところ、割のいい仕事が入ったと言っていたとか。酔いが回って口数が増えると、これは前金だが仕事を済ませれば更に大金が入るとも言ったそうです。ろくに働きもせずに酒場に入り浸っているので普段から鼻つまみ者でしたが、その数日、酔いつぶれる頃には妙に据わった目をして、ぶつぶつと何やら呟いていたと。』

それって。

『だれかに……金でつかわれた、ということですか？』
やはりというか当然というか、黒幕がいたのか。

『君が渡してくれたあれらの荷物だが』
スタンフォード卿が、脇に置かれた私が死体から追いはぎした荷物に向かつて顎をしゃくる。

『この剣、そのような者が持つにはどうも鋼はがねの質が良すぎるのだ。しかも、柄つかに彫られた……が削り取られておる』

気遣うような視線をくれたリーヴさんに大丈夫と目顔で頷いて、まじまじと木彫りの柄を眺める。確かに卿が指した先、本来ならば家紋風の幾何学模様が描かれていたらしい部分は判別できないよう意図的に削られていた。

『それとな……』

言うか言うまいか逡巡しているような口調。

卿はしばし口を濁していたが、私の顔を見て溜息混じりに続けた。

『旅支度は、一人分しかされていなかった。』

一人分？

怪訝に思っていると、リーヴさんが低い声で引き取った。

『当時村に来ていた行商人から聞き出した情報です。サザランドまでは馬でどのくらいかかるかを聞かれた後、そこまで行けるだけの日持ちのする食糧を一人分くれ、と言われたと。旅慣れていないので、勝手がわかるものに見繕わせたのでしょう』

覚えのある地名が出てきた。以前どこまで行こうとしていたのだと聞かれて、とっさに口にした地名が話題にのぼって内心焦る。

パチッ。

サザランド、と書かれた点の上に銅貨がもう一枚乗せられる。

『馬はこの村で手に入れたものではないようだが、あの馬格ではここからサザランドまでのような長距離の移動は、やはり一人しか無理だ』

言われた言葉を翻訳して、更に理解するまでに時間がかかった。そうでなかったら、私はわめき散らしていたに違いない。

「なぜ……エリカが命を狙われなければならないのですか？」

冷静になれと努めて低く搾り出した言葉は、我ながら震えていた。驚きに？いや、怒りにだ。

睨みつけるように正面のスタンフォード卿の顔を見やって、はっとした。

「私はしがない田舎領主だが、さりとてこの行いを許すつもりはない」

断固とした口調の中に私以上の憤怒が潜んでいるのを聞き取り、私は返ってふっと冷静になる。

「例えこちら以上に大きな力に対してであつてもな」

にやりと不敵に笑んだ卿の顔は大変魅力的ではあるが、はっきり言つてかなり悪役っぽかった。

だからと言つて、どこの誰だか知らない主犯に同情する気持ちは、欠片も湧いてこなかつたけれども。

「エリカを攫つた者の手口だが」

スタンフォード卿は、コツコツと長い指でテーブルを叩きながら続ける。

「あれの母の……が入ったブローチがあつたらう。あの日の前日エリカは外した後部屋の引き出しに仕舞っていたのだが、それが無くなつたらしい。騒がせまいと周りのものに告げる前に一度

自分で探そうとしていたそうだ』

いかにもエリカらしい。

『引き出しに入れたのが自分の思い違いで、どこかに落としているかもしれないと心当たりのある場所を探していた時、村はずれの道で男に声を掛けられたらしい。お嬢さん、道で拾ったブローチの絵に似ているね。と。当然エリカは喜んで、ブローチの持ち主だと言った。すると男は驚き困った様子で、こう言ったそうだ』

一息ついた卿はリーヴさんが淹れてくれたお茶で喉を潤した。

『それは悪いことをした。ぜひ返したいが、実はきょうだいが急に病で倒れたのでこれから急いで遠くに行かなければならなくて、森の外れに馬を待たせてある。ブローチはその馬につけた荷物の中に置いてきてしまったので、よければ一緒に取りに来て貰えないか。とね』

思わず溜息が出た。

『それで、ついに行ってしまったんですね』

私の言葉は少々非難がましく響いたらしい。

『無論、エリカには厳しく言い置いた。……あれは世間をまだ知らない。この館で生まれ、この丘が続く土地の風景やそこで暮らす人々しか知らないのだ。確かに愚かな行動をしたが、決して愚かな娘ではないのだよ』

親の欲目かもしれないがね、と卿は自嘲するように付け足した。

『いえ、エリカは賢い子です。きっと、本当はよくない事だと解っていた、と思います。それでも、行かずにはいられなかったんですよ。……お母さんが、大好きだったんですね』

卿は優しく遠い目をする。

『ああ。だが、あの子は母のことを覚えてはいないだろう。……妻はエリカを産んだあと体を壊して、しばらくして亡くなったのでね』

そうだったのか。だったらなおさらあの肖像画は何物にも替えがたいはずだ。危険だと解つていても、求めずにはいられないほどに

『素敵な方だったんでしょね』

答えはなかったが、卿の表情は年月を経て今も尚、彼かの人が胸に住んでいることを穏やかに物語っていた。

『それで、本当の犯人は、どこの誰なんですか？』

私はお茶をこくりと一口飲んで、両手を温めるようにカップを包み込む。甘みがついたお茶はやや酸っぱい後味で、乾いた口の中がさっぱりした。

卿が片眉を上げる。どうやら彼の癖のようだ。

『私は犯人が解つたと言ったかな、リーヴ』

『いえ、はっきりとは仰っていませんでした。ナギさんは誰だとお
思いですか？』

急に思わぬ方向からボールを投げ返されてうるたえる。

聞いたのは私なのに。

目の前の二人は興味深げにこちらを見守っているので、しびしび口を開いた。

『………本当の犯人はよく解りませんが、協力者なら解る気が
します』

『ほう、協力者。なぜだね？』

面白がっているのは気のせいだろうか。

『………エリ力を攫った男は、金で雇われていたんですよ。それで馬や、立派な剣を、用意してもらっていた』

ちらりと相手を見て同意を確認する。

『森まで誘う手口は、酒浸りの乱暴者が考えたものとは思えない。エリカのブローチを、たまたま拾ったというのも、変です。部屋の引き出しから、盗ったと考えるのが自然、だと思えます。だとしたら、それができるのは、館に出入りできる人だけです』

『それは誰だと思う？』

推理小説なら怪しい人ほど無実だったりするが、実際はそんなこともないだろう。

『森に、エリカを探しに来た人たちの中の一人が、今思えば、変でした。他の人が私に真つ直ぐ敵意を向けているのに、その人だけが、やけに冷静で、なのに狙いが私から、それていた気がするんです。．．．．．ええ、ネル口のことです。それに、さっきも、なんだか私を．．．．．絡め取ろうとするような目で見てくる』

そう。思えばあの男の視線は殺気ではなかった。それよりもっと嫌な感じ。こちらを自分の持つ毒に浸そうとするかのような。

背筋が寒くなってぶるつと震えた私の頭を、卿の手がぼんぼんと叩く。顔を上げると傍らのリーヴさんも励ますように頷いてくれて、気分を持ち直した。

『お金は、半分しか受け取っていなかった。ということは、サザランドへは、もう半分のお金を受け取るため、行こうとしたのでは．．．．．行ったこともないのに、サザランドに行こうとしていたんですよね。でも、そこまでエリカを連れて行くつもりは、なかった』
あえて「殺すつもりだった」という言葉は使わなかった。

『男は、この土地の者、だったのでしょうか？その領主の娘に対してのこんな仕事を、引き受けるといふことは、普通じゃありません。その、あなたによつぽどの恨みを持っていれば、別かもしれません。それに、仕事が終わっても、もうここには戻ってこれられないでしょう。それと引き換えても、決心した。依頼主は、少なくとも協

力者　　仮にネル口とします、を抱え、攫った男にも十分な物が与えられる人。男が嘘を教えられていたら、別ですが、仮にサザランドとすれば、その大金持ちか、卿の仰ったように、貴方より大きな力を持った人物……例えば、その領主ということになるんじゃないか、と思う、んですが……」

最後は尻すぼみになった。自分で言っていて、思った以上に大事おもしろかもしれないと思ったのだ。

3 (後書き)

大変ご無沙汰しております。

更新をお待ちくださっていた方がいらっしやったら、申し訳ありませんでした。

各話の削除方法がやっと分かって、空のページを削除できました。ご迷惑をおかけしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7877o/>

かざなぎの記

2011年9月29日08時29分発行